

# 崩レ塚遺跡

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告5—

1989. 8

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

題字：永礼達造津山市長

# 崩レ塚遺跡

—津山市中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告5—

1989. 8

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

## 序

崩レ塚遺跡は津山中核工業団地造成により発掘調査された遺跡であります。開発と文化財保護の問題は古くて新しい問題であり、常に表裏一体のものであります。幸い原因者である津山市土地開発公社の御配慮により、唯一の前方後円墳（一戸東1号墳）は緑地公園に取り入れ、現状保存措置を講ずることができました。54haという広大な津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡が点在しています。再三にわたってそれらの保存の協議がなされましたか、最終的に遺跡を保存すると造成ができないという結論に達し、記録保存を余儀なくされたのであります。本書はその第5集にある報告書であります。

さて、崩レ塚遺跡はB地区が周知の遺跡として確認されていましたが、A地区は試掘調査により新たに確認されたものであります。弥生時代中期の集落では津山中核工業団地内遺跡のなかで最も古いものであることが判明しました。また、炭窯と考えられている窯状遺構が3基検出され、今まで不明だった部分が、少しづつではありますがわかつてまいりました。

このように、発掘調査によって得られる情報量の蓄積は、遺跡保存措置と同じように非常に重要なことであると思います。いずれにせよこうして一遺跡を記録保存できたことは、この上ない喜びであります。

ここに、ささやかではございますが報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をいただければ幸いです。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大な御協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

平成元年8月31日

津山市教育委員会  
教育長　萩原賢二

## 例　　言

1. 本書は津山中核工業団地に伴う崩レ塚遺跡の発掘調査報告書である。
1. 津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡があるが、本書はその第5集にあたるものである。
1. 発掘調査経費はすべて、原団者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査は、津市教育委員会文化課主事行田裕美、同主事保田義治が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書では挿図に造構の略称を用いている。略称名は次の通りである。  
SH：住居址・住居状遺構、SB：建物址、ST：段状遺構、SG：土壤塗  
1. 本書第8図に使用した「津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 本書の執筆はI・II・III-2(1)を行田が、III-1・2(2)・3～5を保田が担当し、編集は保田があたった。
1. 遺物整理には杉山紀子、飯田和江、野上泰子、光永純子の協力を得た。また、遺物の実測の一部に埋蔵文化財調査員木村栄子の協力を得た。
1. 出土遺物及び図面は、津市教育委員会二宮埋蔵文化財整理事務所に保管している。

## 本文目次

I	津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過	1
1	津山中核工業団地造成に至る経過	1
2	発掘調査に至る経過	2
II	津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡	4
1	津山中核工業団地内の遺跡	4
2	周辺の遺跡	7
III	崩レ塚遺跡	9
1	位置と立地	9
2	調査の経過	9
(1)	調査に至る経過	9
(2)	調査経過	10
3	調査体制	10
4	調査の記録	11
(1)	A地区の遺構と遺物	11
(2)	B地区の遺構と遺物	24
(3)	遺構に伴わない遺物	39
5	まとめ	43

## 挿 図 日 次

第1図	津山市位置図	1
第2図	津山中核工業団地位置図	2
第3図	第I・II期工事区分図	2
第4図	周知の遺跡分布図	2
第5図	調査前航空写真（北から）	3
第6図	トレーニング設定状況航空写真（南から）	3
第7図	津山中核工業団地内遺跡分布図（S = 1 : 10,000）	4
第8図	津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図（S = 1 : 25,000）	7
第9図	崩れ塚遺跡周辺地形及びグリッド配置図（S = 1 : 2,000）	9
第10図	A地区遺構配置図（S = 1 : 500）	11
第11図	住居状遺構1平・断面図（S = 1 : 80）	12
第12図	住居状遺構1出土遺物（S = 1 : 4）	13
第13図	住居址2平・断面図（S = 1 : 80）	13
第14図	住居址2出土遺物（1 ; S = 1 : 4、2 ; S = 2 : 3）	14
第15図	住居址3平・断面図（S = 1 : 80）	15
第16図	住居址3出土遺物（1～14 ; S = 1 : 4、15 ; S = 1 : 3）	16
第17図	段状遺構1平・断面図（S = 1 : 80）	17
第18図	段状遺構2平・断面図（S = 1 : 80）	18
第19図	段状遺構2出土遺物（S = 1 : 4）	18
第20図	段状遺構3平・断面図（S = 1 : 80）	19
第21図	段状遺構3出土遺物（S = 1 : 4）	20
第22図	窯1窯体内陷入焼土塊検出状況及び平・断・立面図（S = 1 : 100）	21
第23図	窯1土層断面図（S = 1 : 40）	22
第24図	窯1出土遺物（S = 1 : 4）	23
第25図	遺構に伴わない遺物1（S = 1 : 4）	23
第26図	B地区遺構配置図（S = 1 : 500）	24
第27図	住居址4平・断面図（S = 1 : 80）	25
第28図	住居址4出土遺物（1～7 ; S = 1 : 4、8 ; S = 1 : 3）	26
第29図	建物址1平・断面図（S = 1 : 80）	27
第30図	建物址1出土遺物（S = 1 : 4）	28

第31図 段状遺構4平・断面図 (S = 1 : 80) .....	29
第32図 段状遺構4出土遺物 (S = 1 : 4) .....	30
第33図 段状遺構5平・断面図 (S = 1 : 80) .....	30
第34図 段状遺構5出土遺物 (S = 1 : 4) .....	31
第35図 上墳墓1平・断面図 (S = 1 : 40) .....	31
第36図 上墳墓1出土遺物 (S = 1 : 3) .....	31
第37図 窯2・3窯体内陥入焼土塊及び炭化物検出状況 (S = 1 : 100) .....	32
第38図 窯2・3上層断面図 (S = 1 : 80) .....	33
第39図 窯2天井焼土塊実測図 (S = 1 : 10) .....	34
第40図 窯2平・断・立面図 (S = 1 : 100) .....	35
第41図 窯2煙出石組図 (S = 1 : 40) .....	36
第42図 窯3平・断・立面図 (S = 1 : 100) .....	37
第43図 窯3煙出石組図 (S = 1 : 40) .....	38
第44図 窯3出土遺物 (S = 1 : 4) .....	38
第45図 窯3埋土中混入遺物 (S = 1 : 4) .....	38
第46図 遺構に伴わない遺物2 (S = 1 : 4) .....	40
第47図 遺構に伴わない遺物3 (S = 1 : 4) .....	41
第48図 遺構に伴わない遺物4 (S = 1 : 3) .....	42
第49図 遺構に伴わない遺物5 (S = 2 : 3) .....	42
第50図 ナイフ形石器 (S = 2 : 3) .....	42

## 表 目 次

第1表 津山中核工業団地内遺跡調査一覧表 .....	6
第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表 .....	8

## 図 版 目 次

図版1-1 崩レ塚遺跡A地区全景 (南から)	
2 住居状遺構1	
図版2-1 住居址2	
2 住居址3	
図版3-1 段状遺構1	

- 2 段状遺構 2
- 図版 4-1 窯 1 段状遺構 3  
2 窯 1 全景
- 図版 5-1 窯 1 煙出石組部分  
2 窯 1 全景（炊口側から）
- 図版 6-1 住居址 4  
2 建物址 1
- 図版 7-1 段状遺構 4  
2 段状遺構 5
- 図版 8-1 窯 2・3・段状遺構 5 全景（上から）  
2 窯 2・3・建物址 1・段状遺構 5 全景（南から）
- 図版 9-1 窯 2 土層断面C 上方溝  
2 " 窯体内  
3 " 側庭作業面
- 図版 10-1 窯 2 検出状況全景（炊口側から）  
2 窯 2 天井焼土塊出土状況（山側から）  
3 天井焼土塊
- 図版 11-1 窯 2 完掘状況全景（炊口側から）  
2 窯 2 煙出石組部分
- 図版 12-1 窯 3 検出状況全景（煙道側から）  
2 窯 3 煙出石組部分  
3 窯 3 横口・柱穴部
- 図版 13-1 热残留磁気測定資料採取風景（人物は伊藤・時枝両氏）  
2 热残留磁気測定資料採取状況（窯 3）  
3 土壇墓 1
- 図版 14 出土遺物（弥生土器）
- 図版 15 出土遺物（須恵器・土師器・石器・土製品）

## I 津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過

### 1 津山中核工業団地造成に至る経過

昭和50年に開通した中国縦貫自動車道は津山市の産業・教育・文化・レクリエーション等あらゆる面に大きな影響を与えた。市内の東に津山インター、西には院庄インターが設置され、それに接続する幹線道路網を主軸として、山陰と山陽、阪神圏と西日本の結接点として位置的な重要性が高まっている。さらに将来中国横断自動車道、瀬戸大橋及び新岡山空港の建設と相まって、中国地方内陸部における交通の要衝となるものと予想され、津山市は内陸部最大の都市として今後ますます発展が期待されている。

現在、津山市には院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地の5つの工業団地があるが、いずれも企業誘致が完了しており、今後さらに企業の進出が予想されている。そこで津山市は地域経済の活性化と雇用の拡大をはかり若者が定住できる地域社会をめざして、本格的な工業団地である津山中核工業団地の建設を決定したのである。この計画は昭和50年に計画されたもので、中国縦貫自動車道の開通により社会的諸条件が好転する背景の中で、津山圏域の定住圏計画でもある津山新都市整備圏計画の中に計画された東部に勝央中核工業団地(100ha)、中央に津山工場公園(154ha)、西部に久米工場公園(170ha)と通産省の工業再配置政策の主旨にかなった内陸工業の開発拠点として、地域振興整備公団の事業採択を要請してきた。しかし、昭和50年3月、最終的に津山市独自で対応することを決定し、



第1図 津山市位置図

従来津山工場公園と呼称していたものを現在の津山中核工業団地の名称に変更した。その後、工業適地指定をし、農業振興地域を解除して都市計画の用途指定をするなどの推進を図り、昭和57年から地権者交渉を開始し、協力を得られなかつた地域を除き最終的に54.1haに規模を縮小し工事を発注する運びとなった。

## 2 発掘調査に至る経過

昭和59年5月10日付津土開公第4号で文化財保護法第57条の3にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から「埋蔵文化財に関する協議について（通知）」が提出された。これは、事業予定地の工区を当初第Ⅰ期工事、第Ⅱ期工事の2工区に分けていた段階（第3図）の第Ⅰ期工事部分約123,000m<sup>2</sup>に相当するものである。これを受け津山市教育委員会では地形的にみて、周知の遺跡（第4図）以外にも容易に遺跡の立地が予測されたので立木伐採後改めて分布調査を実施することにした。立木伐採後の分布調査ではかなりの範囲にわたって遺跡の立地が予測されたので確認調査を実施することにした。確認調査はバックホーを借上げ、幅2mのトレンチを等高線走向に直行するように5m間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は6月27日～7月5日までを費やした。この結果、遺跡は丘陵のほぼ全域に拡がることが確認され、一貫西遺跡と命名した。東接する一貫東遺跡は前方後円墳1、円墳1、方墳1の周知の遺跡に加え、弥生土器の散布も認められたので全面発掘調査の実施は避けられなかった。

第Ⅱ期工事分については、昭和60年11月27日付



第2図 津山中核工業団地位置図



第3図 第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図



第4図 周知の遺跡分布図

津土開公第17号で協議がなされた。面積は約462,000m<sup>2</sup>である。この地域についても山林原野であり、前回と同様の扱いをすることとなった。すなわち、立木伐採後再度協議をするという



第5図 調査前航空写真（北から）



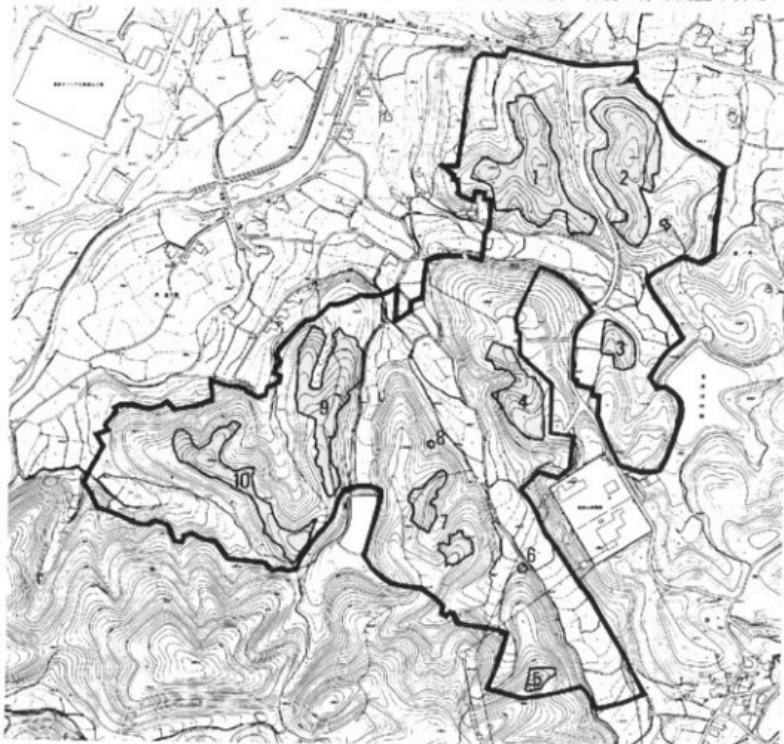
第6図 トレンチ設定状況航空写真（南から）

ことである。立木伐採後新たに発見した埋蔵文化財は円墳4基であった。しかし、一貫西遺跡の場合と同様、地形的に遺跡の立地が予測される地点については確認調査を実施することで合意した。この結果、周知の遺跡も含めて深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳、崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畠遺跡、小原遺跡が調査対象となったのである。

## II 津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡

### 1 津山中核工業団地内の遺跡

事業計画予定地内の周知の遺跡は昭和51年の分布調査時では前方後円墳1（一貫東1号墳）円墳1（一貫東2号墳）、方墳1（一貫東3号墳）、弥生土器・須恵器の散布地2ヶ所（崩レ塚遺跡、大畠遺跡）が認められるにすぎなかった。しかし、立木伐採後の再度の分布調査で新たに



第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図 (S-1 : 10,000)

円墳4基（クズレ塚古墳、大畠1・2号墳、小原1号墳）を発見した。しかし、その後のトレントによる確認調査で周知の遺跡も含め、最終的に10遺跡を数えるにいたった。以下、遺跡ごとに概要を記すことにする。

### 1 一貫西遺跡

弥生時代中期の集落、古墳3基、奈良時代と考えられる製鉄関連遺構群よりなる。弥生時代中期後半の集落は住居址4軒、建物址2棟、段状遺構等により構成される。古墳の内訳は5世紀末頃と考えられる方墳2基と6世紀末頃と考えられる円墳1基である。製鉄関連遺構としたものには住居址1軒、建物址6棟、段状遺構、廐津捨て場等がある。製鉄がは後世の畠地造成のため遺存していなかった。

### 2 一貫東遺跡

弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土壙墓群、古墳8基、中世の建物址等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址10軒、建物址4棟、段状遺構等により構成される。貯蔵穴は47基、土壙墓は49基を数える。古墳の内訳は前方後円墳1基、円墳3基、方墳4基である。時期はいずれも5世紀代と考えられる。尚、前方後円墳は緑地公園に取り入れ現状保存措置を講じた。中世に属するものには建物址2棟、段状遺構等がある。

### 3 深田河内遺跡

弥生時代中期の集落、古墳時代の段状遺構、中世の建物址等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址2軒、建物址1棟より構成される。古墳時代の段状遺構には鐵冶炉も含まれる。中世の建物址は2軒を数える。

行田裕美・保田義治『深田河内遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集 1988年

### 4 別所谷遺跡

弥生時代中期の集落、奈良時代の段状遺構よりなる。弥生時代中期の集落は住居址8軒、長方形窓穴住居状遺構1軒、建物址9棟、段状遺構等により構成される。奈良時代の段状遺構からは鐵滓が出土している。

### 5 崩れ塚古墳群

方墳3基、円墳1基より構成される古墳群である。方墳3基はいずれも箱式石棺を主体部にもち、円墳は石蓋土壙墓である。いずれの古墳からも出土遺物はなく、時期は断定できない。

### 6 クズレ塚古墳

昭和27年、一部調査された古墳である（註1）。横穴式石室を主体部に持つ円墳である。横穴式石室現存長約9mを測り、津山市内では最大級のものである。石室の奥壁側には陶棺1体が納められていた。時期は6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。古墳の下層から焼けた礫群と共に繩文土器23点が出土した。

### 7 崩れ塚遺跡

弥生時代中期の集落、炭窯と考えられている窯状造構3基よりなる。弥生時代中期の集落は住居址3軒、長方形住居状造構1軒、段状造構等より構成される。

### 8 柳谷古墳

横穴式石室を主体部にもつ小円墳である。銀象嵌頭椎大刀把頭、精尾金具が出土した。時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

保田義治『柳谷古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集 1988年

### 9 大畠遺跡

弥生時代後期の集落、古墳2基、製鉄関連造構等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状造構等により構成される。他に土壙墓も検出されている。古墳はどちらも木棺直葬墳であり、時期は6世紀前半頃と考えられる。製鉄に関連する造構には住居址、建物址、鉄滓集中地點等がある。時期は7世紀前半頃と考えられる。他に炭窯と考えられている窯状造構1基がある。

### 10 小原遺跡

弥生時代後期の集落、古墳4基、炭窯と考えられている窯状造構3基よりなる。弥生時代後期の集落は住居址16軒、建物址4棟、貯蔵穴12基、段状造構等により構成される。古墳はいずれも円墳である。1号墳は箱式石棺、2号墳は土壙、3号墳は石蓋土壙を主体部にもつ。4号墳は周溝が検出されただけで、内部主体は不明である。1号墳と2号墳には製塩土器が伴出している。時期は5世紀末～6世紀初頭頃と考えられる。

第1表 津山中核工業団地内遺跡調査一覧表

番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定年度
1	・貫西遺跡	22,000m <sup>2</sup>	S59 11/26～5/26	行田裕美	昭和64年度 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告3
2	・貫東遺跡	20,000m <sup>2</sup>	S60 3/7～12/2	湊哲夫	未定
3	深田河内遺跡	3,300m <sup>2</sup>	S61 3/4～3/5, 3/6～3/7	行田裕美	昭和63年度(既刊) 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告2
4	別所谷遺跡	9,400m <sup>2</sup>	S61 7/26～10/23	行田裕美	昭和65年度 6
5	崩レ塚古墳群	1,400m <sup>2</sup>	S62 8/28～10/19	小郷利幸	昭和64年度
6	クズレ塚古墳	200m <sup>2</sup>	S62 8/4～11/6	小郷利幸	* 4
7	崩レ塚遺跡	5,100m <sup>2</sup>	S62 S63 10/7～1/30	保田義治	昭和64年度 * 5
8	柳谷古墳	100m <sup>2</sup>	S62 10/9～11/12	保田義治	昭和62年度(既刊) * 1
9	大畠遺跡	18,000m <sup>2</sup>	S61%～%，S62%～%， S62%～%，S63%～%	行田裕美 小郷利幸 保田義治	昭和65年度 * 7
10	小原遺跡	12,000m <sup>2</sup>	S61%～S62%, S62%～%， S62%～S63%	行田裕美 小郷利幸 木村裕子	昭和65年度 * 8

## 2 周辺の遺跡

津山中核工業団地は吉井川の支流広戸川の東岸下流域の津山市瓜生原・金井地区に位置する。この一帯は標高130~150mの丘陵と比高差30~50mの平野部が樹枝状に入りこんだ複雑な地形を呈している。この一帯から広戸川と同じく吉井川の支流である加茂川流域にかけての地域は非常に遺跡の密な部分である。



第8図 津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 25,000)

1 津山中核工業団地造成地内遺跡	2 野介代遺跡	3 押入西遺跡
4 押入飯網神社古墳群	5 獅塚遺跡	6 能満寺古墳群
7 六ツ塚古墳群	8 玉琳大塚古墳	9 觀山遺跡
10 三毛ヶ池古墳群	11 車塚古墳群	12 天神原遺跡
13 欽山古墳群	14 天王山古墳	15 和田古墳
16 飯塚古墳	17 美作国分尼寺跡	18 美作国分寺跡
19 長欽山古墳群	20 隠里古墳群	21 西吉田遺跡
22 金井別所遺跡	23 梶原遺跡	24 岡田遺跡

津山市内の集落遺跡の開始は弥生時代前期にまでさかのぼるが、これは現在の津山市街地、宮川下流域に限定されており普通的なものではない。これが各地域に広く認められるようになるのは弥生時代中期以降である。この時期から順を追って津山中核工業団地周辺の遺跡を概観してみたい。まず弥生時代中期に属する遺跡として、押入西遺跡、西吉田遺跡、金井別所遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも住居址数軒から構成されるもので、集落研究、土器の編年研究の上で貴重な資料を提供するものである。後期の遺跡としては環濠集落で著名な天神原遺跡があげられる。古墳時代になるとこの地域は津山市内において最も重要な地域となる。すなわち、津山市内最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基の円墳より構成される古式の群集墳日上歴山古墳群が同一丘陵上に立地することである。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、津山盆地の玄関口、加茂川との合流点にあたるという地理的条件に恵まれたことに起因するものであろう。さらに奈良時代には美作國分寺、同國分尼寺もこの地域に建立されたように古代においては大変重要な役割を担った地域であったのである。

(注1) 渡辺健治「津山市植木クズレ塚古墳」『古代吉備』第7集1971年

第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

1. 津山中核工業団地内遺跡
2. 野介代遺跡 河本 清・橋本聰司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
3. 押入西遺跡 河本 清・橋本聰司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
4. 押入坂鍋神社古墳群 河本 清・橋本聰司・柳瀬昭彦「押入坂鍋神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973年
5. 狐塚遺跡 河本 清「狐塚遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集1974年
6. 能郷寺古墳群 今井 克「原始社会から古代国家の成立へ」「津山市史」第1巻原始・古代1972年
7. 六ツ塚古墳群 今井 克「六ツ塚古墳群調査略報」津山市文化財調査略報3 1962年「六ツ塚古墳群」津山市文化財調査略報No.1 今井 克「六ツ塚1号墳調査略報」津山市文化財調査略報7 1966年 近藤義郎「岡山県津山市六ツ塚古墳群」『日本考古学年報15』1967年
8. 玉琳大塚古墳 今井 克「津山市川崎玉琳大塚調査報告」津山市文化財調査略報第1集1969年
9. 観山遺跡 漆 尚夫「八出觀山遺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3集1977年
10. 三毛ヶ池古墳群
11. 車塚古墳群 「片口車塚古墳」『津山の文化財』1983年
12. 天神原遺跡 河本 清・橋本聰司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』1975年
13. 歴山古墳群 「日上歴山古墳群」津山市埋蔵文化財調査略報No.4 今井 克・近藤義郎「郡集落の盛行」「古代の日本4」中国・四国1970年「日上天王山古墳と歴山古墳群」『津山の文化財』1983年
14. 天王山古墳 「日上天王山古墳と歴山古墳群」『津山の文化財』1983年
15. 和田古墳 行山裕美「日上和田古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集1981年
16. 瓢塚古墳 「岡分寺瓢塚古墳」『津山の文化財』1983年
17. 美作國分尼寺跡 漆 尚夫「美作國分尼寺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集1983年
18. 美作國分寺跡 漆 尚夫・安川豊史・行田裕美「美作國分寺跡発掘調査報告」1980年
19. 長歴山古墳群 河本 清「美作考古学の現状と課題」「古代吉備」第2集1971年 今井 克「原始社会から古代国家の成立へ」「津山市史」第1巻原始・古代1972年
20. 離里古墳群 渡辺健治「美作離里箱式G形調査報告」「古代吉備」第2集1971年
21. 西吉田遺跡 行田裕美「西吉田遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集1985年
22. 金井別所遺跡 行田裕美・保田義治・小郷利幸「金井別所遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集1988年
23. 梶原遺跡 田中 満・井上 弘「梶原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1971年
24. 岩田遺跡 1971年に津山市教育委員会が発掘調査を実施 報告書未刊

### III 崩レ塚遺跡

#### 1. 位置と立地

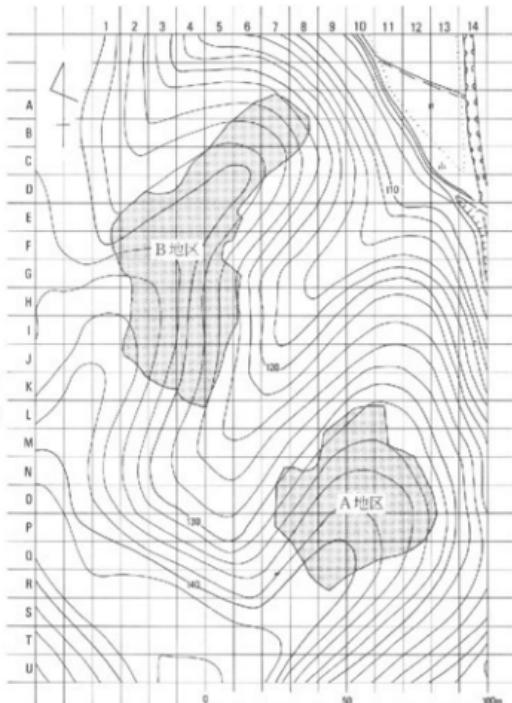
崩レ塚遺跡は岡山県津山市瓜生原1000番地他に位置する。

和気山から北へ樹脂状に派生する丘陵は、平野部に近づくにつれ小支谷が入り込んだ複雑な地形を呈している。遺跡は2つの相並んだ丘陵に分かれて位置し、その間には深い谷部が入り込んでいる。各丘陵上の遺構群はそれぞれ完結した状態を示すために、南東部丘陵のものをA地区、北西部丘陵のものをB地区とする。遺跡の立地する丘陵の東・西両側はいずれも奥深い谷で取り囲まれている。遺跡と中間の谷部との比高差は6~12mを測る。

#### 2. 調査の経過

##### (1) 調査に至る経過

本遺跡のB地区からは事前の分布調査で弥生土器数点を採集した。この結果、B地区は当然調査範囲に入っていたが、地形的にみて、隣接する東西の丘陵にも遺跡の存在が予測されたので、B地区的範囲・規模確認調査時にあわせて調査を実施した。確認調査はバックホーを使用し、幅2mのトレッセを約5m間隔で丘陵頂部及び斜面にかけて全面に設定した。この結果、東側の丘陵（A地区）に弥生時代中期の集落、炭窯と考えられる窓状遺構が存在することが確認された。B地区もA地区同様の結果を得ることができた。B地区の西側の丘陵は柳谷池の堤防の工事の際にかなり削平受けているためか、遺跡は確認されなかった。



第9図 崩レ塚遺跡周辺地形及びグリッド配置図 ( $S = 1 : 2,000$ )

## (2) 調査経過

昭和62年10月7日、A地区の頂部の遺構検出から全面発掘調査を開始した。9日には工事工程の関係から男性作業員が柳谷占墳の調査にかかったため、10月下旬までは女性作業員のみの調査を余儀なくされた。11月6日にはA地Xの弥生集落の調査を終了し、窯1の調査に入った。窯1の発掘が17日には終了し、調査はB地Xの頂部の弥生集落にかかった。A地区の調査の全工程が終了したのは12月10日である。その日より窯2の調査にかかり、25日に昭和62年の調査を終了した。昭和63年は1月5日から、窯3・土壙塁1の調査より開始した。発掘は26日には終了し、器材一式を次の大畠遺跡に移動させた。また、その当日島根大学の伊藤教授・時枝助教授が熱残留磁気測定資料を採取するために、当遺跡を訪れた。当遺跡測量等を含めた全工程の終了は1月30日となった。

## 3. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記の通りである。

発掘調査主体	津山市教育委員会 教育長	福島祐一 (～H1.6.30)
	"	萩原賛二 (H1.7.1～)
	教育次長	森田公男
	参事兼文化課長	内田康雄 (～S63.3.31)
	"	須江尚志 (S63.4.1～)
	文化係長	柳山三千穂
調査担当	主 事	行田裕美
	主 事 (調査時は埋蔵文化財調査員)	保田義治
整理担当	"	保田義治
	整理員	杉山紀子・飯田和江 野上泰子・光永純子
発掘作業員	赤坂寅夫・稻垣幹子・稻垣光男・小原正己・片山久子・神崎きみ江 衣笠宇多江・小林篤子・下山章子・藤嶋雪子・藤嶋律美・龍門安三	

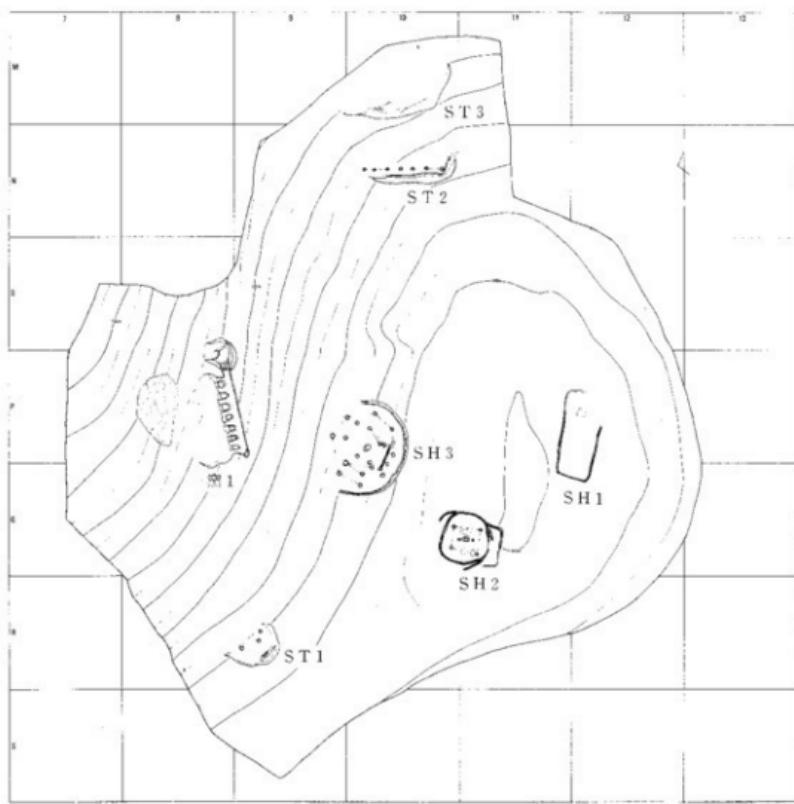
## 4. 調査の記録

### (1) A 地区の遺構と遺物 (第10図)

A地区の遺構には、弥生時代中期に属するものとして住居状遺構1 (SH1)、竪穴式住居址2 (SH2・3)、段状遺構3 (ST1～3) がある。立地は主に頂部から北西部斜面にかけてであり、その他の斜面には検出されなかった。また、正確な時期は不詳だが、およそ古墳時代の所産と考えられる炭窯が1基（窯1）、北西斜面下位に検出された。

### 住居状遺構1 (第11図)

A地区の丘陵頂部に、主軸をほぼ南北にむけて検出された。長軸は7.9m、幅は平均3.3mを測



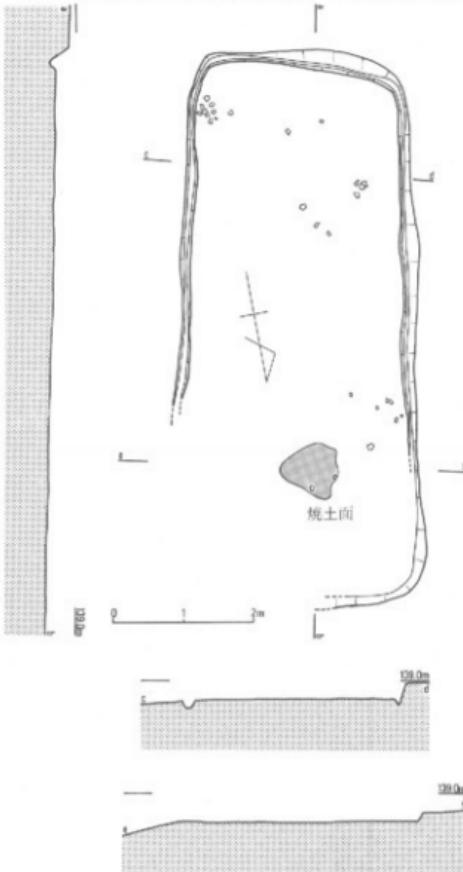
第10図 A地区遺構配置図 ( $S = 1 : 500$ )

る、長方形住居状遺構である。現地表面から床面までの深さは最深部で24cmを測るほど浅いため、北東部コーナーは自然傾斜に解消され遺存していなかった。

床面の壁体部に沿って深さ約5cmを測る浅い溝がめぐる。北東部コーナー及び北西部においては検出されなかった。

床面の中軸上で北から4分の3のところに、径約80cmを測る不定形の焼土面が検出された。かなり強く焼かれており、表面は赤黄色を呈し、被熱部分は表面から約5cmの深さにまでおよんでいた。

床面には柱穴等は全く確認されなかった。周辺部の精査も行なったが、やはり検出されなかつた。



遺物の出土状況としては、全体的にまばらに小破片が出上した。

#### 住居状遺構1出土遺物（第12図）

ナイロン袋に1袋程出土したが、前述どおりいずれも小破片であり、図示できるものは4点である。

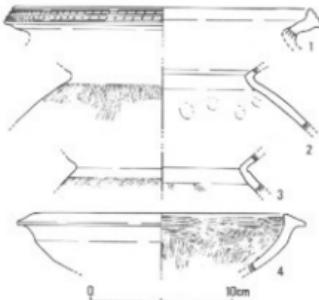
1～3は菱形土器の口縁部である。1は口縁端部であり、端面はやや内傾し、上下に肥厚しており、3条の凹線文を施し、その上から連続刺突文で施している。径は約22cmを測る。2・3とも口縁端部は残存していない。かなり張った胴最大径部から上に向うに従いくびれでゆき、口縁部に向かい「く」の字状に急激に折り返している。外面調整はくびれ部までがナデで、以下がタテ方向のハケ目である。内面調整はやはりくびれ部までがナデで、以下がタテ方向のハケ目を施しており、一部に指頭圧痕が認められる。

4は高杯形土器の杯部片である。

口径約18cmを測る。

第11図 住居状遺構1平・断面図 (S = 1 : 80)

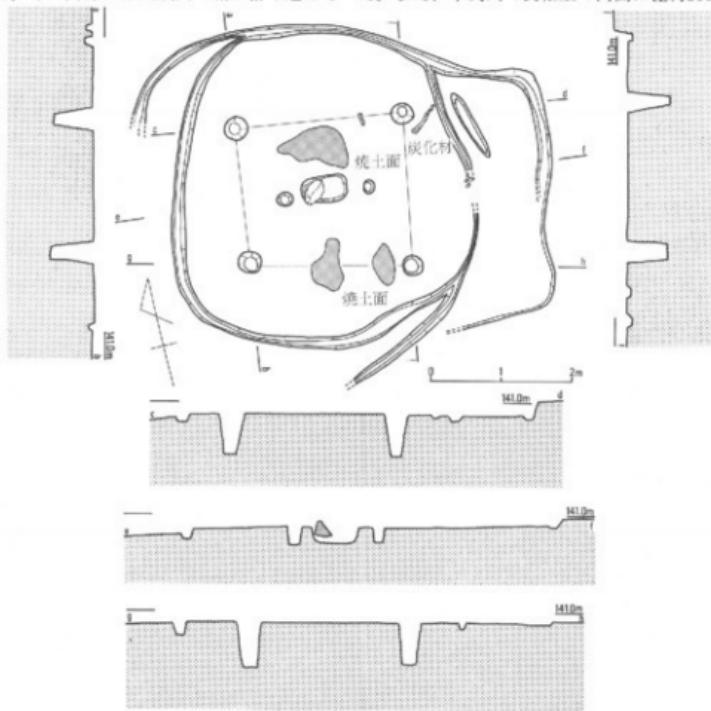
緩やかに外反して口縁部に至り、端部は外方へ拡張する。端面はわずかに内傾している。口縁外面は強いナテ仕上げであり、境界部分には棱が形成されている。内面は上半部は細かいヨコ方向のヘラミガキであり、下半部はタテ方向のハケ目と思われる。



### 住居址 2 (第13図)

A地区の丘陵頂部やや南側の西谷部を望む位置に

検出された。径4.3~4.4mを測る隅丸方形の竪穴式 第12図 住居状遺構1出土遺物(S=1:4) 住居である。床面には焼土面及び炭化材等が認められ、焼失住居であると思われる。柱穴は4本で構成され、各コーナー部分に整然と配されている。柱間距離は西側がやや短く1.9mを、その他は2.3mを測る。中央部には40×70cmの隅丸長方形を呈した、深さ約18cmの中央穴が検出された。その内部には人頭大の礫が落ち込んでいた。また、中央穴の長軸上の両側に径約20cmの



第13図 住居址2 平・断面図 (S=1:80)

小ピットが検出された。

周囲には深さ約5cmを測る壁体溝がめぐる。さらにその外側にも何回かの建て替えを示唆させる浅い溝をめぐっているが、詳細は確認できなかった。また、その壁体溝の東側の一部が約50cmにわたって途切れている状況が確認された。この竪穴式住居も丘陵の頂部に位置するためか、埋土が浅く、竪穴の深さ等は不明である。

住居の床面には中央穴の南北両側と南東部柱穴わきの3ヶ所に焼土面が、北東部柱穴付近に顯著な炭化材が確認された。

遺物は東側にやや多く出土しているが、全体的にまばらで、小破片が多い。

#### 住居址2 出土遺物（第14図）

ナイロン袋1袋分ほど出土しているが、前述どおり小破片が多く、図示できるものは2点である。

1は壺形土器もしくは甕形土器の底部である。底部径は6cmを測る。底部から胴部への立ち上がり部分にはナデが施されている。保存状態が悪いためほとんど看取できなかったが、外面の調整はわずかながらタテ方向のヘラミガキであると考えられる。内面は磨滅が著しく不明であるが、底部付近にはユビオサエの可能性が指摘される。

2はサヌカイト製の平基石錐である。長さ2.5cm、幅2.1cm、厚み0.4cmを測る。両面とも両側から精緻な剥離が中軸部にまで及び、断面形は菱形を呈する。

#### 住居址3（第15図）

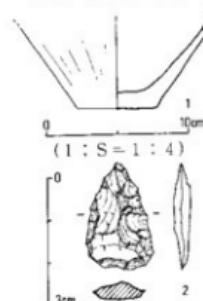
A地区丘陵の西斜面上位に検出された、径約8.3mを測る大型円形竪穴式住居である。斜面部に位置するため、西側は自然傾斜に解消され遺存していなかった。標高は住居床面で139.2mを測る。竪穴の深さは約80cmを測る。

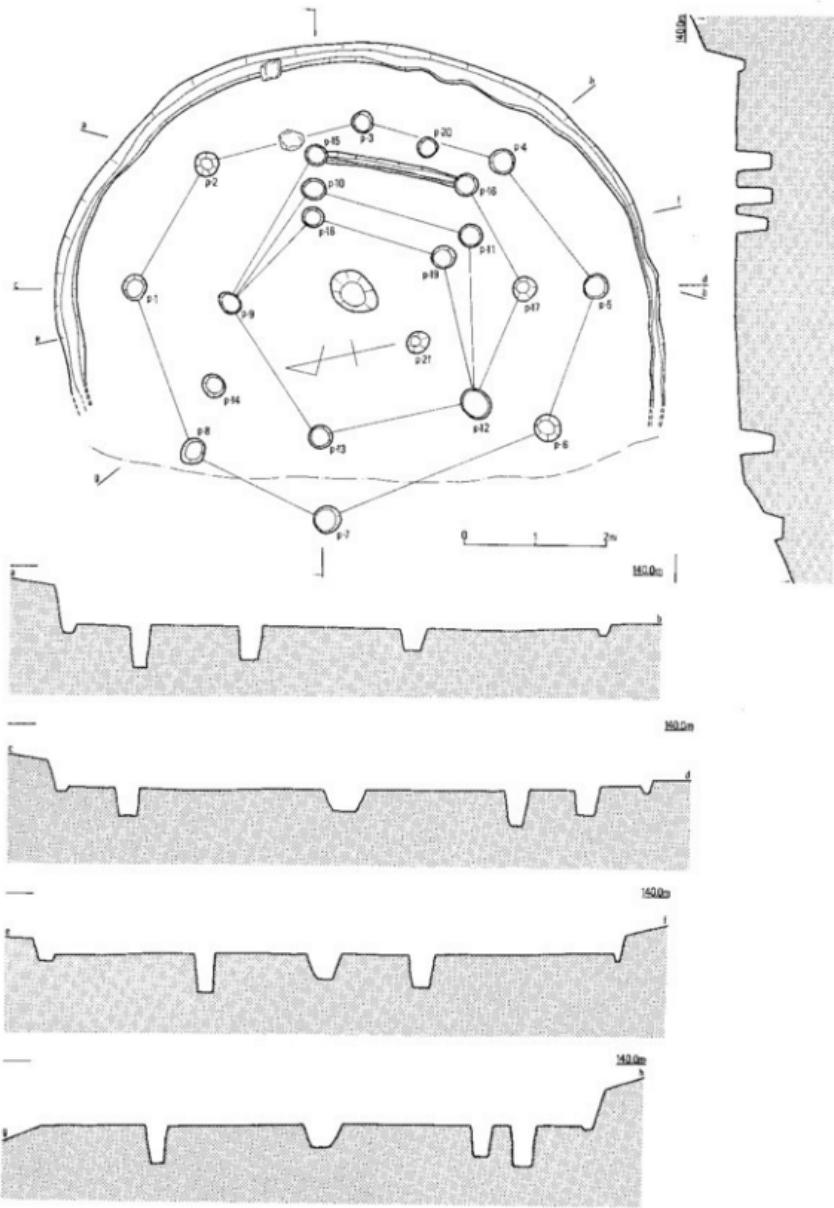
床面には壁体に沿って深さ約8cmを測る壁体溝が検出された。また、東側壁体より1.5mの位

置に、西に1.8mの長さの溝が検出されたが、建て替えの際のものである可能性が指摘される。

本住居は2～3回の建て替え拡張の可能性が認められる。まず、P-9・13の5本柱のものである。前述の内側の溝はその際の壁体溝であると考えられる。また、P-18・19を利用した5本柱の住居も考えられる。その中央には55×80cmで深さ約35cmを測る不定梢円形の中央穴が検出された。

続いて、P-9・12・13を共有し、P-15・18・20を利用した6本柱のものに拡張したと考えられる。この際にも中央穴は前回のも第14図 住居址2 出土遺物 のと共有している。





第15図 住居址 3平・断面図 (S = 1 : 80)

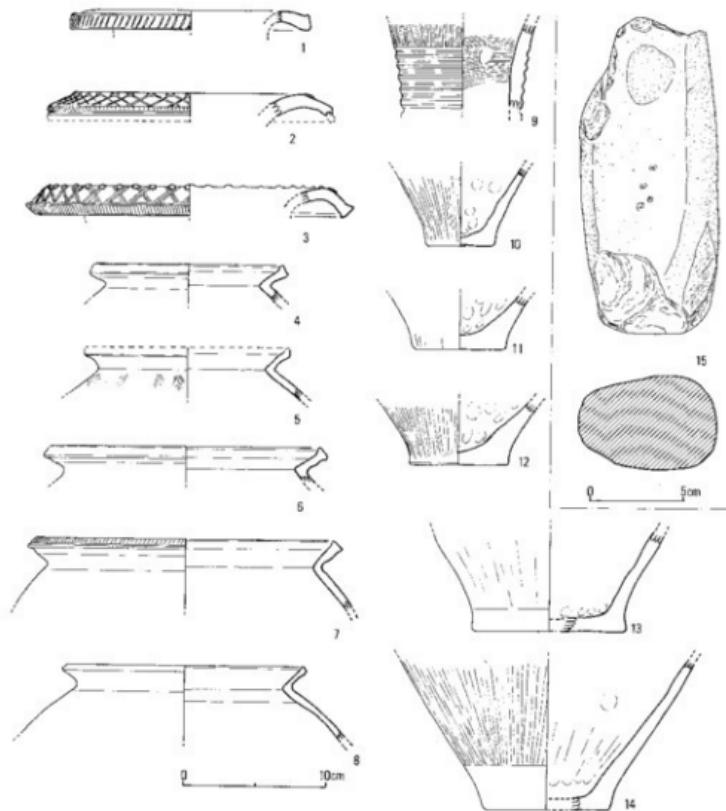
そして、現状で確認される竪穴式住居で、P-1-8を利用した8本柱のものになる。柱間距離は2.0~2.5mを測るが、P-6と7の間が3.4mとやや長くなっている。やはり、中央穴は前回のものと共有している。

遺物は東側の山寄りに集中して出土している。

### 住居址3出土遺物（第16図）

図示できる遺物は15点である。

1~3は壺形土器または器台形土器の口縁部片である。頸部から口縁部に至ると外方に拡張し、わずかに垂れ下がりながら端部に至る形態を呈する。1は端部をやや肥厚させ、端面に連



第16図 住居址3出土遺物（1~14；S=1:4、15；S=1:3）

続刺突文を施している。2は端部をやや下方に拡張させて端面を形成し、凹線文と連続刺突文で施文している。また、口縁上面には2条の斜格子目文と円形浮文が施されている。3は口径がやや大きいので器台形土器である可能性があるが、文様構成は2とほぼ同様である。但し、端部をやや上下に拡張し、端面には凹線文は認められない。9は壺形土器の頭部である。径約9cmで、上方に開いた形状を示す。外面には6条まで粗い凹線文が認められ、地文はタテ方向のハケ目である。内面にはヨコ方向のハケ目調整が認められた。

4～8は壺形土器の口縁部片である。口縁部径は4の14cmから7の22cmまでさまざまである。8で認められるように、胴部最大径はかなり大きくなり、くびれ部がかなり小さくなる傾向が認められる。くびれ部は「く」の字状に外反し口縁部に至り、端部はやや上下につまみだしている。端面には7のように連続刺突文を巡らせるものもある。口縁部の調整はナデであり、それ以下の部分は土器片の保存状態が悪く不明な部分が多いが、5で認められるように外面はタテ方向のハケ目であると思われる。

10～14は壺形土器もしくは壺形上器の底部片である。底部径が10のように5cmと小さいものから13のように11cmと大きいものまでさまざまである。しかし、特徴としては、胴部と底部の屈曲部外面に強いナデが認められ、13のように外方へ開く前に一旦直立する形状を呈するものもある。外面調整はタテ方向のヘラミガキであり、内面には底部に特に指頭圧痕が顕著に認められる。14のように上方へナデ上げているものもある。

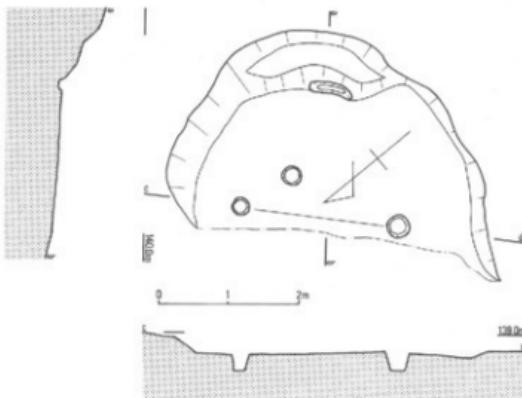
15は砂岩製の叩石である。15.9×5.3×4.9cmで、断面は表裏平坦なほど楕円形を呈する。端部の一方に著しい敲打痕が認められ、側面の一部に研磨痕が確認された。

#### 段状遺構1（第17図）

A地区の調査区の最南端部で西谷部に面した斜面上位に検出された。斜面を「L」字状に削平し、平坦面に3つのピットをあけている。西側は自然斜面に解消されている。平面形は径約4.3mの半円弧状を呈しており、東側の削平は2段で行われ、床面にはわずかながら溝が検出された。

削平の深さは最深部で現地表面から53cmを測る。この形状から住居址の可能性も指摘される。

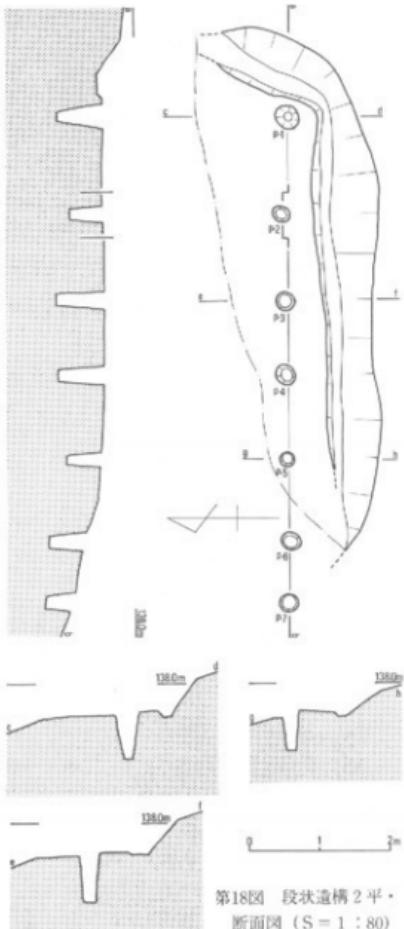
わずかに弥生土器片が出土したが、図示できるものはなかった。



第17図 段状遺構1 平・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

## 段状造構 2 (第18図)

A地区の北側、段状造構3の上位で谷の北西部に面した斜面に検出された。長さ6.6m、幅約1.8mにわたって斜面を「L」字状に削平したものである。平面形は直線的で、東側はほぼ直角にまわっている。北側及び西側は自然傾斜により平坦面は解消されている。平坦面の壁体に沿つて浅い溝が検出された。これも壁体の自然傾斜による解消に伴い、やはり消失している。平坦面には整然と7基からなる柱穴列が検出された。柱間距離は平均1.4mを測る。その軸はほぼ東西方向を向いている。P-6・7は平坦面の外にあるが、柱穴の並び等から同一造構に伴うものと考えられる。



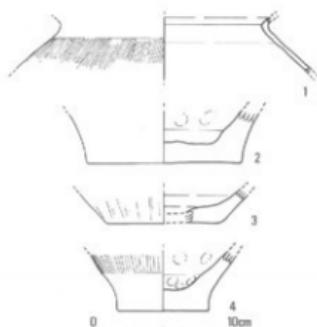
第18図 段状造構2 平・  
断面図 ( $S = 1 : 80$ )

## 段状造構2 出土遺物 (第19図)

図示できる遺物は4点である。

1は壺形土器である。胴部上半からくびれ部の破片であるが、口縁部は検出されなかつた。「く」の字状に外反する形状を呈し外面はハケ目調整が認められる。くびれ部径は約15cmを測る。

2~4は壺形土器もしくは壺形土器の底部片である。いずれも胴部最下位外面はかなり強いナデによって調整されている。その上位はタテ方向のヘラミガキが認められる。内面には指頭圧痕がかなり顕著に認められた。



第19図 段状造構2 出土遺物 ( $S = 1 : 4$ )

### 段状遺構3（第20図）

A地区の調査区の最北端、段状遺構2の下位で、北西の谷部に面した斜面中位に位置する。斜面を「L」字状に削平し、平面形はゆるやかな弧状を呈する。掘り方は2段掘りで行われ、現地表面から本段状遺構平坦面までの深さは、最深部で約1mを測る。長さ10.5mにわたって削平されており、幅は最も広い部分で1.8mを測る。北側は自然傾斜により平坦面は解消されている。平坦面には段状遺構2で認められるような柱穴列は検出されなかつた。

本段状遺構は2段掘り下段がおよそ中頃で終結を示す部分がある（第20図c-d断面付近）。また、遺物の出土状況も東側部分に大半が集中している傾向が指摘できる点等から、本来別の2つの段状遺構が切りあった状態で、検出されたものである可能性も指摘できる。

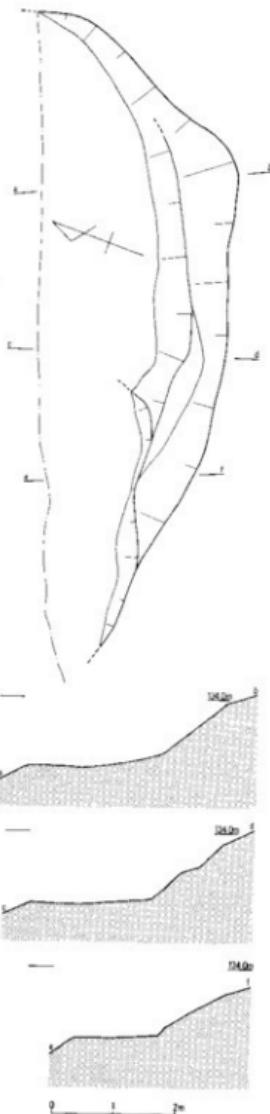
前述どおり、遺物はほとんどが東側部分より出土している。しかし、平坦面に接して出土したものは認められなかった。

### 段状遺構3出土遺物（第21図）

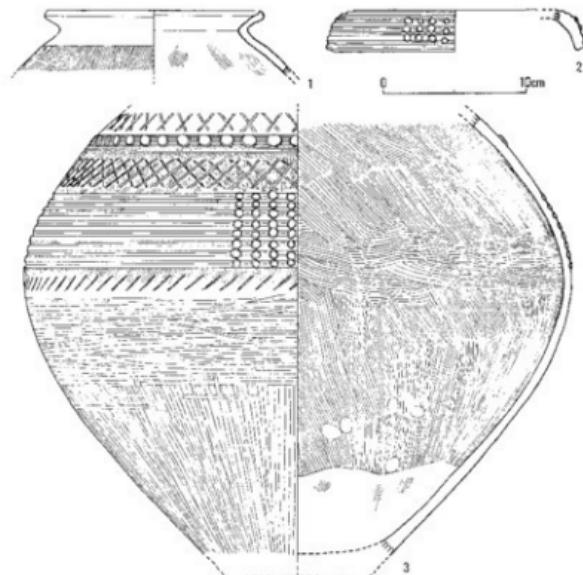
小破片が多く、図示できたのは3点だけである。

1は盤形上器の口縁部片である。口径は15cmを測る。かなり大きく張り出した胴最大径部から頭部で小さくくびれ、再び外反して口縁端部に至る。端部はわずかにつまみあげているだけである。口縁部はナデ仕上げで、それ以下の部分は外面がタテハケ、内面はタテハケの後をナデで仕上げている。

2は壺形上器の口縁部である。おそらく筒状を呈する頭部が最高位付近で外側へ拡張を示す。さらに径約16cmあたりで約3cm垂れ下がる形状を示している。口縁外面には最高位部分から7条の凹線文が認められ、下を向いた口縁端部にも1条の凹線文が認められる。また、口縁外面には3段を単位とした円形浮文が4列まで認められ



第20図 段状遺構3平・断面図  
(S = 1 : 80)



第21図 段状遺構3出土遺物 (S-1:4)

た。調整はナテ仕上げである。

3は壺形上器である。胎土・焼成から2と同一個体であると思われる。数個の破片を図上復元したものである。胴部最大径は39cmを測り、胴部のほぼ中位にある。外面調整は最大径部以上はタテハケ、以下はタテ方向のヘラミガキを最大径部下位の数センチのヨコ方向のヘラミガキで再調整している。内面調整は底部付近はナテ、それ以上は

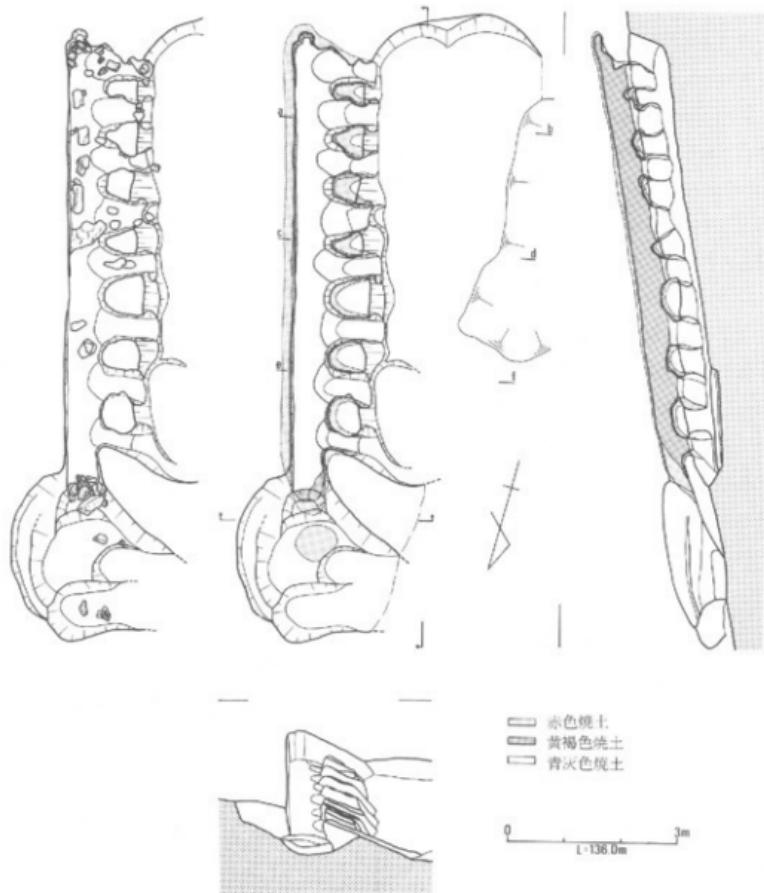
ハケ目であるが、最大径

部付近のみヨコ方向で、他はタテハケである。ハケ目は下から上へ、左回りで施されている。文様構成は胴最大径部に板状工具による連続刺突文、その上位に8条からなる円線文と8段が1単位の円形浮文が4列以上認められる。この円形浮文は各回線文上に乗って施されている。その上位には2条の櫛状工具による斜格子目文が2段に施され、その間に数条の櫛描直線文とそれに付されたやや大きめの円形浮文が認められる。斜格子目文はまず右下がりのものを施し、統いて左下がりものを施している。

### 窯1 (第22・23図)

A地区の東斜面の中位よりやや下に検出された。「炭窯」といわれる特殊窓状遺構である。等高線の走向に対してかなり斜行している。窓の谷側にはかなり広い範囲で炭化物の堆積が認められた。

焼成部全長は約7.9m、同床面幅は0.5mを測る。焼成部はすべて地表下を半地下式に掘り窪めて築かれている。山側壁面の高さは約50cmを測る。谷側には8つの横口がそなわっている。窓体内には本来その天井部を形成していたと考えられる焼上塊が検出された。また、その他赤く被熱した小児頃大の礫も数点出土している。焼成部床面は青灰色を呈し、同壁体と横口壁体部分は黄褐色を、さらにその外側は赤褐色を呈している。焼成部床面は全く平坦ではなく横口に



第22図 廃1窯体内陥入焼土塊検出状況及び平・断・立面図 ( $S = 1 : 100$ )

対応する部分のみ弧状にわずかなえぐりが認められる。横口天井部はすべて落ちてしまっていた。横口の正面形は橢円形をしていたものと思われ、その幅は30~45cmを測る。

焼成部の左側には炊口及び前庭作業面が位置する。炊口部分には人頭大の被熱塊が数個検出された。前庭作業面は斜面を弧状に掘り澄めて造られており、数回の小削平が認められる。前庭作業面のはば中央部が径60cmにわたって被熱していた。また、その後部から上陣器が一括出土している(第24図)。前庭作業面と炊口との間には2段の低い段が形成され、炊口が作業面より約35cm高く造られている。また、焼成底部にみられた青灰色被熱部分はその段にまでは至らず、黄褐色及び赤褐色被熱部分も前庭作業面平坦面には至らないことが確認された。

横口より谷側には10~20cmの低い段を有した側庭作業面が形成されている。およそ焼成部全長と同じ長さを持ち、幅は約2.9mを測って自然傾斜面に解消されている。

普通「炭窯」に認められる上方溝は検出されなかった。また、煙出穴端方部分も単独では造られておらず、焼成部最先端に煙出穴が築かれていた。その周辺には小児頭大の被熱礫が多く認められたことから、窯体内部に煙出穴及び煙出石組を築いていたものと考えられる。また、この石組のみで煙出穴を構築していたのではなく、粘土等でおおかたの枠組を造って一部に小児頭大の礫を利用していたものと考えられる。この煙出穴の焼成状況は全体が黄褐色に被熱している。床面の青灰色焼土面はその直前で黄褐色に変わっている。

窯1の焼成部傾斜度は約10度を測る。

窯体内的堆積状況の特徴としては、最下層の床面に接した部分に天井の焼土塊及びそれが土壤化したものとの堆積していることである。平面図上にはその核となっていた部分のみ図示したが、窯体内にはほとんど一面にわたって認められた。また、a-b断面に認められるように焼土層に挟まれるような状況で炭化物の黒色土（第7層）が検出されている。この黒色土は側庭作業面の最下層を覆うものと同一層であることが認められている。

側庭作業面の堆積状況の特徴としては、横口から薄く堆積を始め、作業面全体を覆う炭化物

の黒色土（第7層）である。最も厚い部分では40cmを測る。同一層でも下位ほど炭化粒の大きさを増すことが確認された。また、ブロック的に灰褐色土（第5層）が横口すぐの部分で検出されている。一部天井焼土塊が上層で確認された。



#### 土層注記

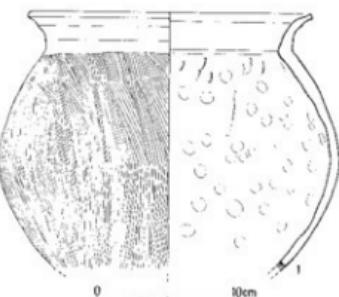
- 1. 鮎黄褐色
- 2. 赤褐色
- 3. 赤黄褐色
- 4. 赤褐色(焼土ブロックを含む)
- 5. 灰褐色
- 6. 鮎青黃褐色
- 7. 黒色(炭化物を多く含む)
- 8. 熱山風化土
- 9. 赤褐色(焼土ブロックを含む)
- 10. 赤色(焼土ブロックを含む)
- 11. 灰青褐色

第23図 窯1 土層断面図 ( $S = 1:40$ )

### 窓1出土遺物（第24図）

窓1の前庭作業面から土師器1個体が一括出土している。

口径20cm、胴部最大径24cmを測る。胴部は球形でくびれて緩やかに外反し、口縁端部に至る。端部には外方にわずかな端面を持ち、わずかにつまみ上げている。内面凹曲部には明瞭な稜を持たない。外面の調整はくびれ部までがタテ方向のハケ目で、下から上へ、左回りで施している。胴部内面には無数の指頭圧痕が認められた。また、一部にヘラ状工具の引っ搔き傷が確認されている。口縁部においては内外面ともナデ仕上げである。



第24図 窓1出土遺物 (S-1: 4)

### A地区の造構に伴わない遺物（第25図）

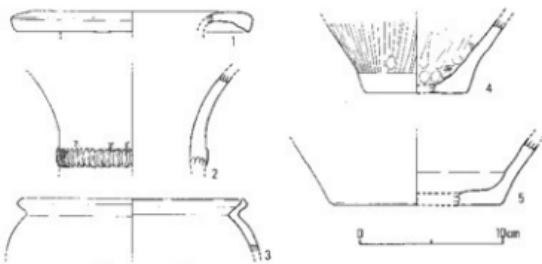
1・3・4は窓1の埋土中より出土しているので、章を改めずここで記述することにする。

1・2は壺形土器である。1は口縁部で直立した頸部から水平に外方へ拡張し、肥厚しながら端部に至るものである。口径は17cmを測る。2は壺形土器の頸部片である。筒状の頸部が上方にむかって開いてゆく形状をしている。頸部中位外面には約1cmの突帯を1条めぐらせ、その上を爪形の連続刺文で加飾するものである。突帯部分の径は約11cmを測る。

3は壺形土器の口縁部である。胴部から「く」の字状に外反し、口縁端部に至る。端部はやや摘み上げ、端面を上外方にもっている。外面は磨減が著しく調整は不明だが、内面は暗褐色を呈し、指頭圧痕がいくつか認められた。口縁部径は16cmを測る。

4・5は壺形土器もしくは壺形土器の底部片である。4は底部径約7cmを測る小さいもので胴最下部は底部の強いナデ調整の影響でやや直立気味になってから外方へ開いてゆく。外面の調整はタテ方向のヘラミガキである。内面の調整はヘラケズリの後、底部においては顕著なユビオサエであり、それ以上の部分は指によるナデ上げが認められる。5は底部径が約12cmと大きいものである。4に見られるほど顕著な底部のナデは認められない。外面調整は不明だが、内面は底部にナデを施している。

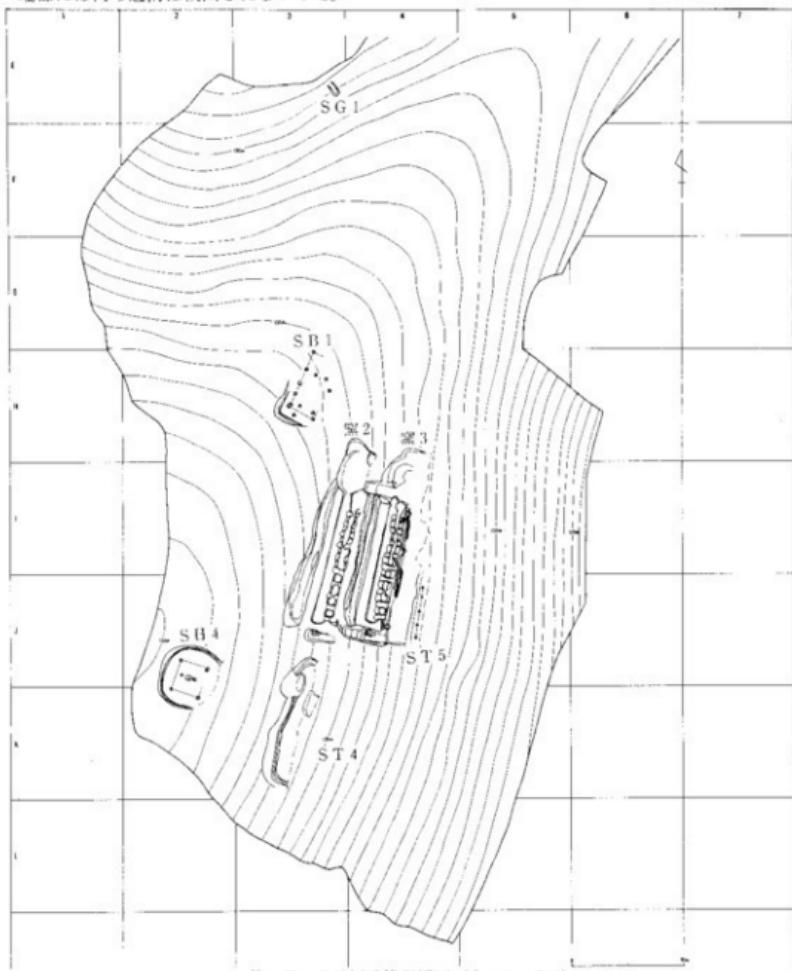
いずれも弥生時代中期の上器片である。



第25図 造構に伴わない遺物1 (S-1: 4)

## (2) B地区の遺構と遺物 (第26図)

B地区的遺構には、弥生時代に属するものとして竪穴式住居1(SH4)、建物址1(SB1)、段状遺構2(ST4・5)があり、立地は主に頂部から東斜面である。古墳時代に属するものとして窯2(窯2・3)、土壙墓1(SG1)がある。窯は東斜面部で、弥生集落の立地と重なっている。土壙墓はやや離れて調査区北寄りで西谷に面して立地している。土壙墓より北側の丘陵先端部には何ら遺構は検出されなかった。



第26図 B地区遺構配置図 ( $S = 1 : 500$ )

#### 住居址 4 (第27図)

B地区の丘陵のはば頂部で東谷に面して検出された。B地区の遺構の中では最高位であり、当住居より西側部分は確認調査時に後世の削平のためか、遺構が発見されていない。

径約5.5mを測る円形の竪穴式住居である。西側部分は自然傾斜により解消されている。柱穴は4本からなり、等高線の走向に対して平行もしくは直行と整然と配されている。柱穴径は約25cmで、深さは平均50cmを測る。柱間は等高線走向に平行するものが2.7m、直行するものが2.5mを測る。住居域のはば中心に中央穴を検出した。これは長軸70cm、短軸45cmの楕円形の平面形をしており、深さ約20cmで断面台形を呈するものである。また、長軸にそって両側にそれぞれ小ピットが検出された。山側のものはやや小さく径20cm、深さ30cmを測り、谷側のものは径30cm、深さ25cmを測る。また、中央穴南側の床面には40×70cmの不定形の焼上面が認められた。色調は赤褐色を呈している。

床面の壁体に沿って壁体溝が検出された。これは床面からの深さが最深部で8cmを測る。南側部分は自然傾斜による壁体の消失とともに壁体溝も解消されている。

竪穴式住居の掘り方の本来の深さは不明であるが、現状では西側部分の壁が最も高く約60cmを測る。

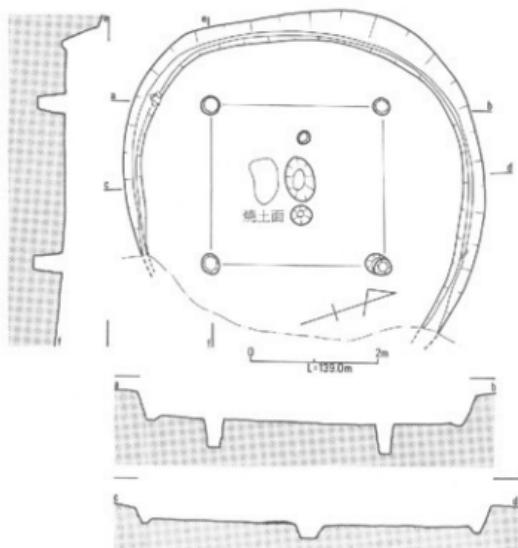
埋土中からも多数遺物は出土しているが、床面上のものは周囲の壁体溝の上もしくはその中から多く出土している。

#### 住居址 4 出土遺物

(第28図)

弥生土器7点、石器1点の計8点を図示した。

1～3は變形土器の口縁部である。1は口径約14cmを測る。くびれ部は「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。端部は上方にややつまみ上げている。内面調整は不明だが、外面は口縁部以下がタテ方向のハケ目である。2はやはり屈曲部を鋭角に持つもので、口径は18cm



第27図 住居址 4 平・断面図 (S = 1 : 80)

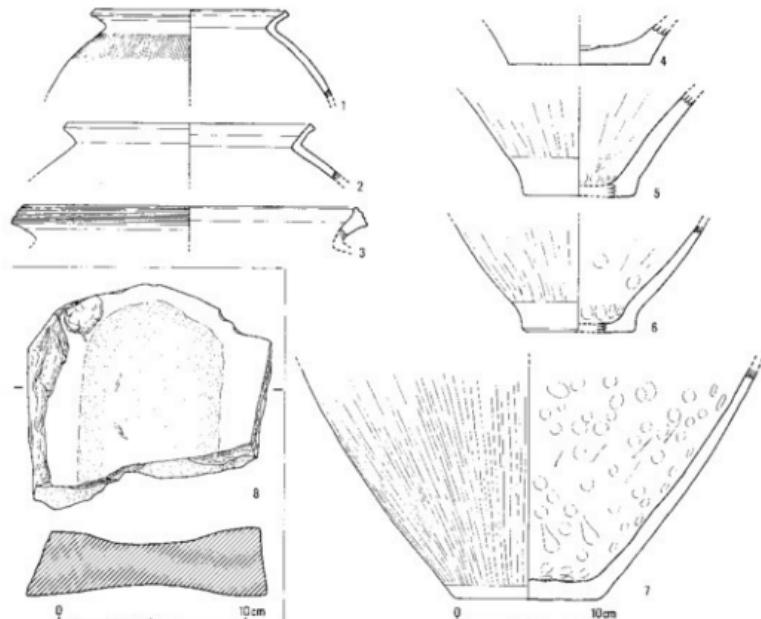
を測る。調整は不明である。3は口縁部片のみで、壺形土器の可能性もある。口縁部径は25cmを測る。口縁端部は上下にやや拡張し、端面には3条の凹線文を施している。

4～7は壺形土器もしくは壺形土器の底部である。底部径は4～6のように8cm程度のものと、7のように10cmのものの2者がある。5・6は胴最下部の数センチに底部の強いナデを受けてやや直立気味になってから外反している。外面調整はタテ方向のヘラミガキであるが、その部分のみナデ消されている。内面は底部に多数の指頭圧痕が認められる。胴部はハケ日の地文にユビによるナデ上げが観察された。7は胴最大径部付近まで立ち上がる大型片である。5・6程顯著ではないが、底部付近にはナデが認められる。外面調整はタテ方向のヘラミガキであり、内面には無数の指頭圧痕及びユビによるナデ上げが認められる。

8は砂岩製の凹石である。長さ12cm、幅13cm、厚さ3.6cmを測る。表裏両面とも凹みが認められる。表面で長さ8.6cm、幅7.5cm、深さ0.7cmを測る。

#### 建物址1（第29図）

B地区丘陵の鞍部で東西両方の谷部を望む位置に検出された。住居址4とは22m離れて立地している。当初、西谷に面した段状造構であると考えられたが、柱穴列の並びや遺物の出土状



第28図 住居址4出土遺物 (1～7 : S=1:4, 8 : S=1:3)

況等から建物址と認識した。

まず、カギ形に直行する段状施設が検出された。東西2.5m、南北3.0mを測り、深さは最深部で60cmである。壁体にそっては浅い溝が確認された。北から東にかけては自然傾斜により解消されている。その段状施設の作り出す平坦面に梁間1間、桁行3~4間の建物址が確認された。

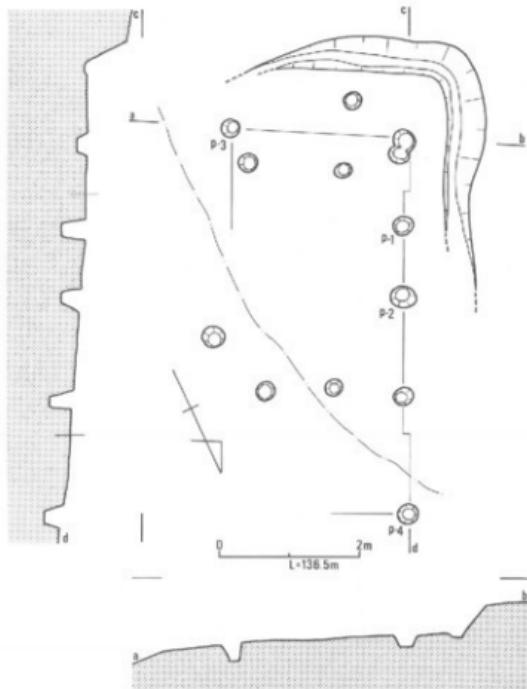
建物は梁間が2.5m、桁行が3.6~5.2mを測る。桁の各柱間の平均距離は1.0mである。柱穴は径30cm前後で、柱底レベルは標高135.2~3mである。西側には桁行として5本の柱穴が認められるが、柱間距離、柱底レベル等からP-4は建物には属さないもの可能性がある。また、東側桁行部分の柱穴は現状のレベルが柱底レベルより低くなっているので、すでに消滅してしまったものと考えられる。

#### 建物址1出土遺物（第30図）

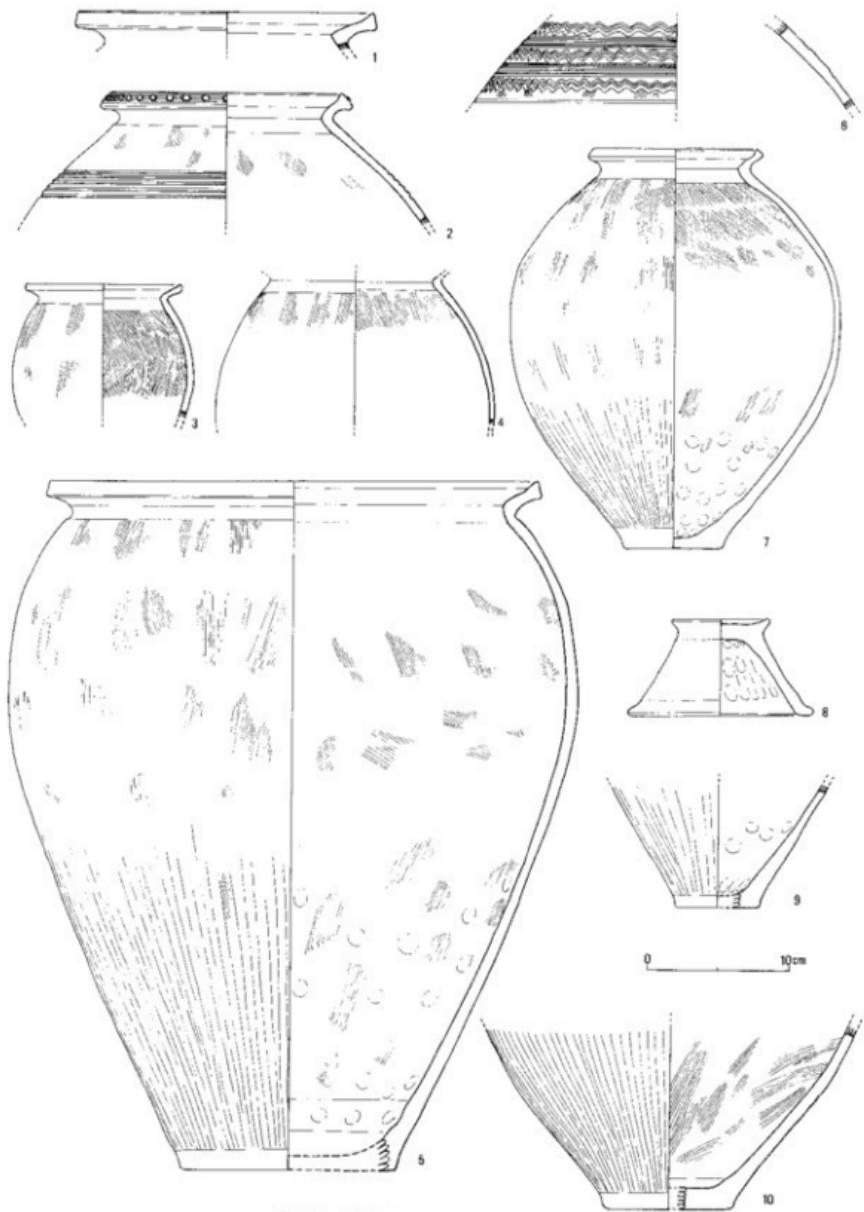
10点を図示した。7はP-1の一括遺物である。5はP-1~3のそれぞれにはいっていたものであり、口縁部はP-3から、底部はP-2から、胴部は各ピットから出土している。

1~5・7は壺形土器である。2は装飾の多いもので、口縁端部には3条の凹線文と円形浮文で、肩部には凹線文で加飾している。3に見られるように胴部の内外面調整はタテハケである。5は口径35cm、胴部最大径40cm、高さ49cmの大甕である。外面下位はタテハケ、内面には無数の指頭圧痕が認められる。7は口径12cm、胴部最大径23cm、高さ23.5cmを測る。胴部上半はタテハケ、下半は外面がヘラミガキ、内面はタテハケにユビオサエであり、底部には強いナデが認められる。

6は壺形土器の肩部である。外面の文様構成は、タテハケの地文に櫛描波状文と櫛



第29図 建物址1 平・断面図 (S = 1 : 80)



第30図 建物址1出土遺物 ( $S = 1 : 4$ )

描直線文が交互に5段描かれ、その下位に凹線文の巡るものである。

8は蓋形土器である。最大径13cm、高さ6.9cmを測る。外面は丁寧なナデで、内面は天井部からのナデおろしである。

9・10は蓋形土器もしくは壺形土器の底部片である。いずれも外面はタテ方向のヘラミガキであるが、内面は9が指のナデ上げ、10がタテハケである。また、底部周辺には強いナデの痕跡が認められる。

#### 段状遺構4（第31図）

B地区の南側、東斜面上位で住居址4の下位に検出された。長さ12m、幅2.6mにわたって斜面を「L」字状に削平したものである。平面形は直線的で、両側は(ま)直角に曲がり、自然傾斜に解消される。また、平坦面には壁体に沿って浅い溝がめぐっている。本遺構の北側部分に径約2mの土壤状の擾乱がみとめられたが、これも何らかの遺構である可能性がある。平坦面に柱穴及び焼土面等は何ら検出されなかった。

#### 段状遺構4出土遺物（第32図）

出土遺物の量は多くはなかったが、3点図示した。

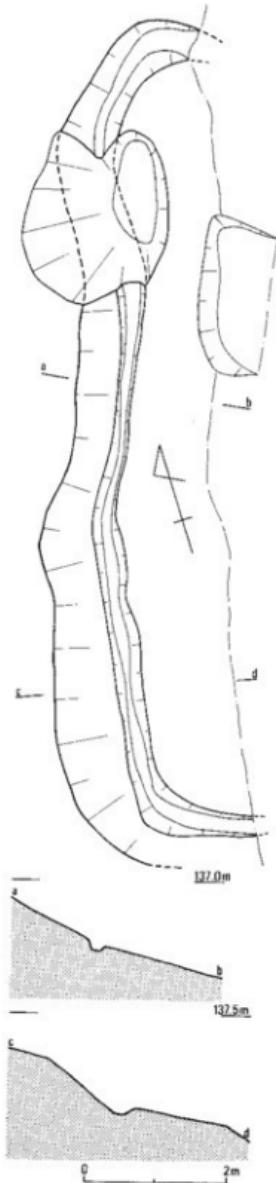
1は蓋形土器の口縁部片である。口径15cmを測る。胸部は内外面ともタテハケであり、口縁部はナデ仕上げである。

2は蓋形土器もしくは壺形土器の底部片である。底部径が6cmと小さい。調整は内外面ともナデである。特に、内面底部には指頭跡痕が顕著に認められる。

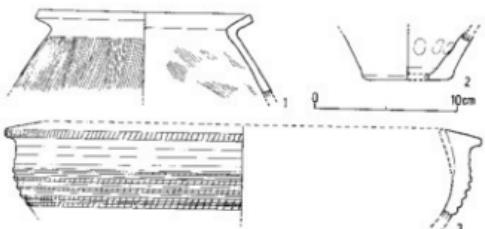
3は台付鉢形土器もしくは高杯形土器の杯部片である。口径は34cmを測る。体部はやや丸みを帯び、外面には5条の突帯を巡らせ、その上から板状工具の小口による連続刺突文を施している。口縁端部は内外面に肥厚しながら拡張し、上部の端面はやや内傾する。正面の端面には連続刺突文を巡らせている。

#### 段状遺構5（第33図）

窓3の側庭作業面の下位から検出された。B地区の東斜面中



第31図 段状遺構4 平・断面図  
(S = 1 : 80)



第32図 段状造構4出土遺物 (S = 1 : 4)

測る。平坦面には5本からなる柱穴列が検出された。径20cmで、柱穴底レベルが標高132.8mに揃っている。柱間距離は北側2本は80cmと短いものの、他は1.2mを測る。

位に立地する。

斜面を「L」字状に削平したものである。しかし、掘り方は窓3の側庭作業面により削られているので不明である。また、長さも周囲の擾乱にあって詳しくは判明しなかったが、

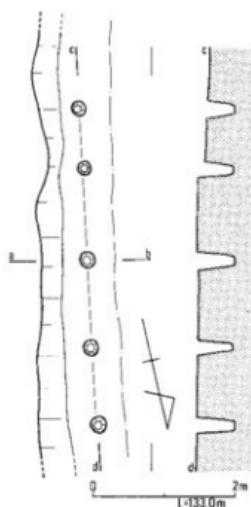
#### 段状造構5出土遺物 (第34図)

図示できたものは5点である。

1は甕形土器の口縁部である。円筒形の頸部から外方へ拡張し端部に至る。端部は肥厚して上方へわずかに拡張を示す。口径は18cmを測る。

2・3は甕形土器の口縁部である。いずれもくびれ部で鋭角に折れ、口縁端部に至るものである。端部はやや上方につまみ上げている。胴部外面はタテハケ、内面はタテハケの後ナデを施している。口径は2が16cm、3が21cmを測る。

4・5は器台形土器であり、同一個体と考えられる。4は口縁部であり、径は18cmを測る。頸部から外方へ拡張し、2.5cm垂れ下がった口縁部を形成する。上面には4条の凹線文と円形浮文を、外面には3条の凹線文、連続刺突文、円形浮文を施しており、かなり装飾性に富んでいる。5は脚部片である。径は24cmを測る。端部はやや肥厚し、内面には強いナデによる稜がみられる。外面は底部に描寫波状文をめぐらせ、その上位に8条の粗い凹線文が認められる。内面調整はヨコ方向のハケ目で、一部にユビオサエの痕跡が認められる。

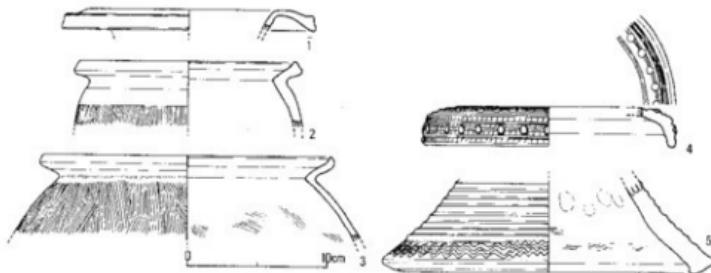


第33図 段状造構5平・断面図  
(S = 1 : 80)

#### 土壙墓1 (第35図)

B地区では本造構のみ離れた位置に検出された。調査区北西部の西斜面やや上位に立地し、建物1の北約24mの距離を有している。

長軸1.5m、短軸55cm、現状での深さ40cmを測る、長方形の土

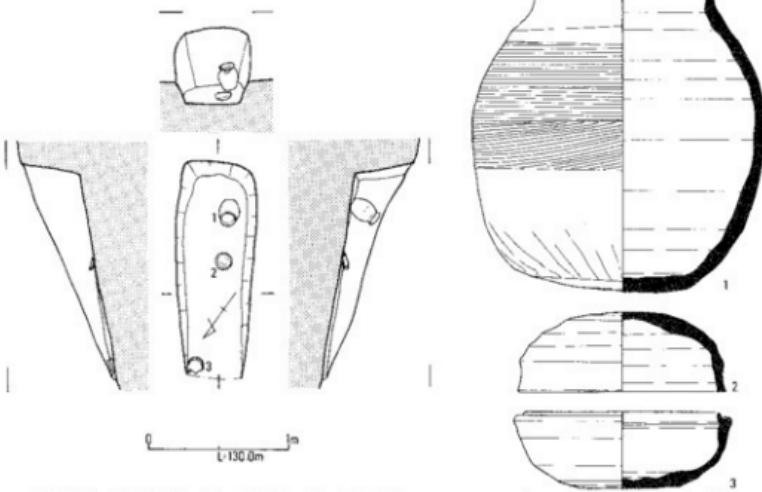


第34図 段状埴構 5 出土遺物 ( $S = 1 : 4$ )

埴墓である。床面はやや谷に向かって傾斜している。3点の須恵器が出土した。

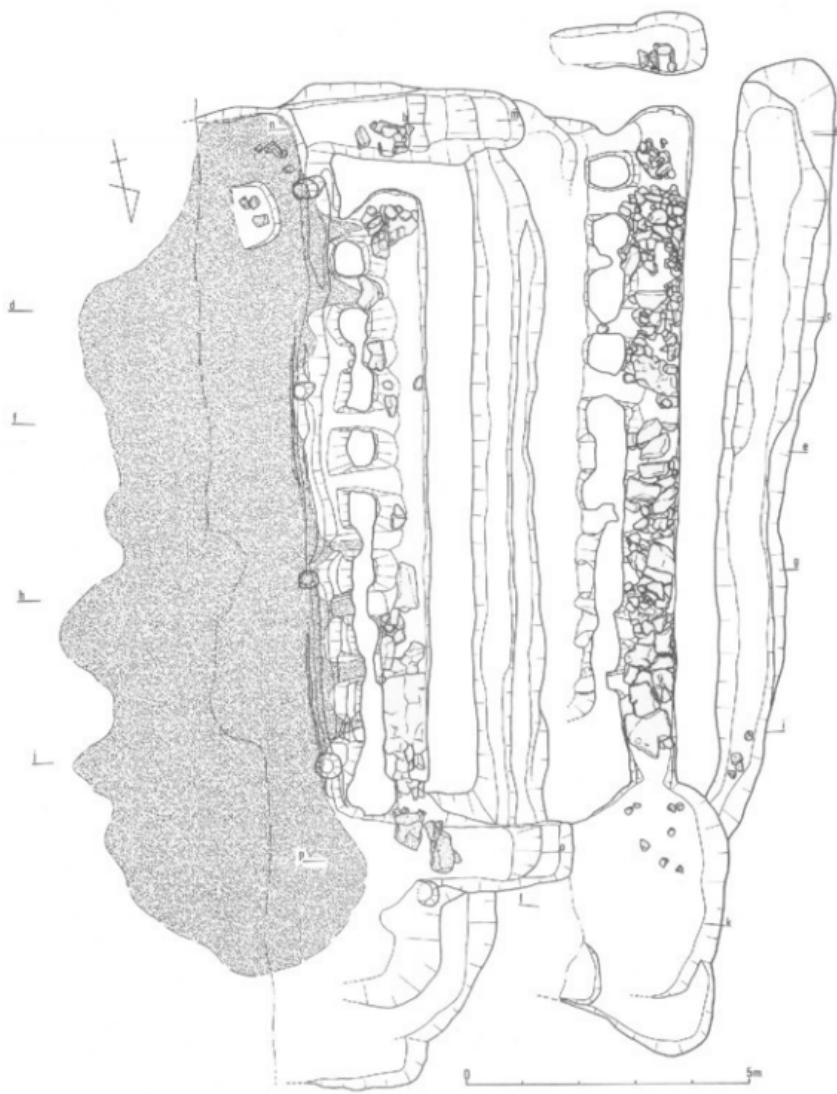
#### 土壤墓1出土遺物（第36図）

1は須恵器の短頸壺である。口径10cm、最大胴径15cm、器高17.5cmを測る。外面中位にはヨコ方向のカキ目が認められ、底部付近には指によるナデ上げが確認された。2は杯蓋で口径11cm、器高4.3cmを測る。天井部の器高3分の1までが不定方向ヘラケズリの後ナデ調整である。口縁端部には平坦面を持つ。3は杯身である。口径10cm、最大径11.5cm、器高4cmを測る。立ち上がりが短く内面に折り返しの線が認められる。体部はやや丸みを帯び、器高の3分の1以下が不定方向のナデ仕上げになっている。

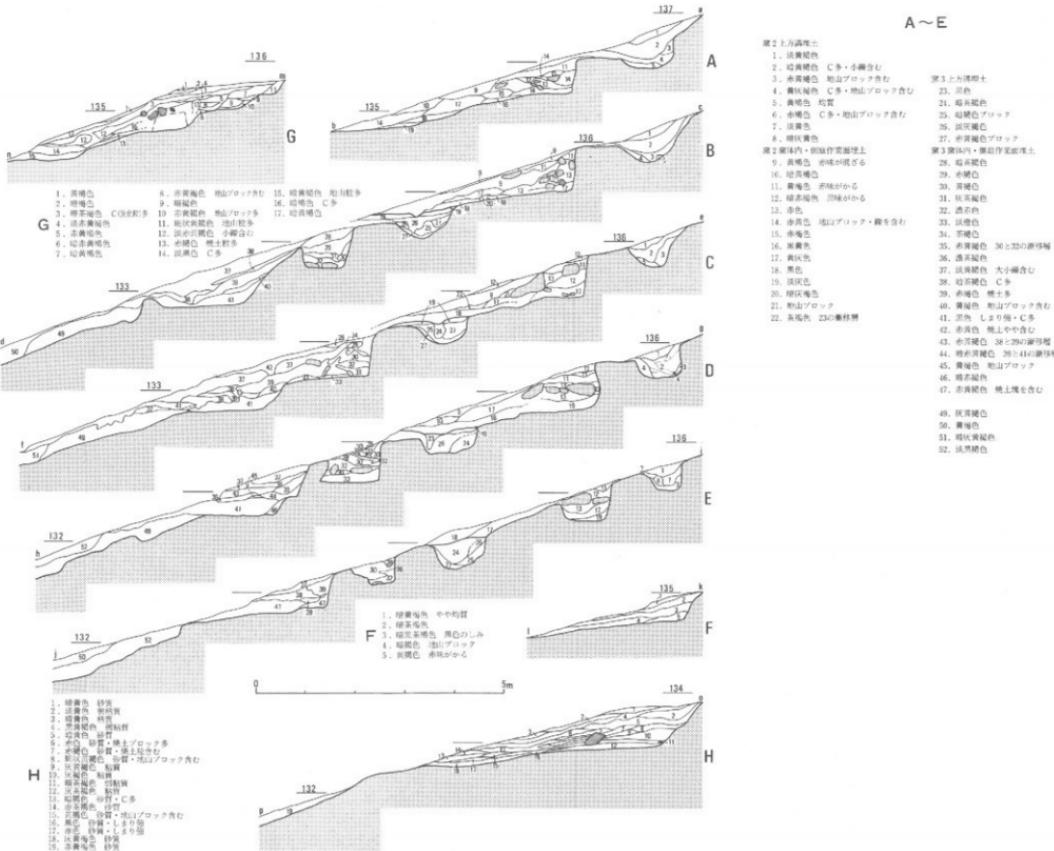


第35図 土壤墓1 平・断・立面図 ( $S = 1 : 40$ )

第36図 土壤墓1 出土遺物 ( $S = 1 : 3$ )



第37図 廟2・3窯体内陥入焼土塊及び炭化物検出状況 ( $S = 1 : 100$ )



第38図 空2・3 土層断面図 (S=1:80)

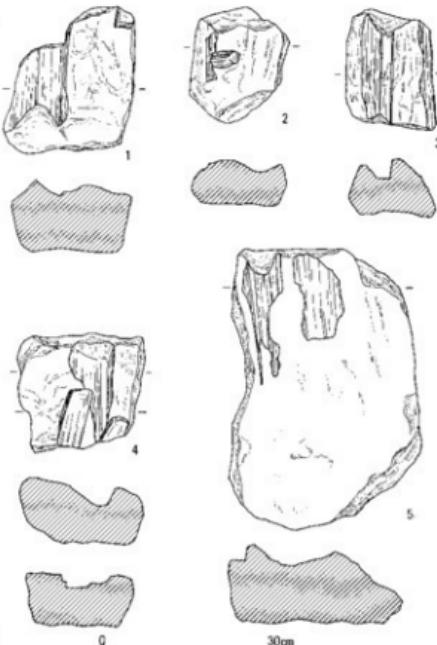
## 窯2・3検出状況（第37・38・39図）

B地区の丘陵東斜面や高所に、2基の窯とその下位の炭化物黒色土面が検出された。黒色土はほとんど急峻な斜面に流されており、範囲はさほど広くはなかった。

便宜的に上の窯を窯2、下の窯を窯3とした。窯2の黒色土はかなり広い範囲に認められ、かなり下位にまであったが、特に下位の部分は窯3の黒色土面と合流しているため、窯2に伴う黒色土の範囲は確定できなかった。

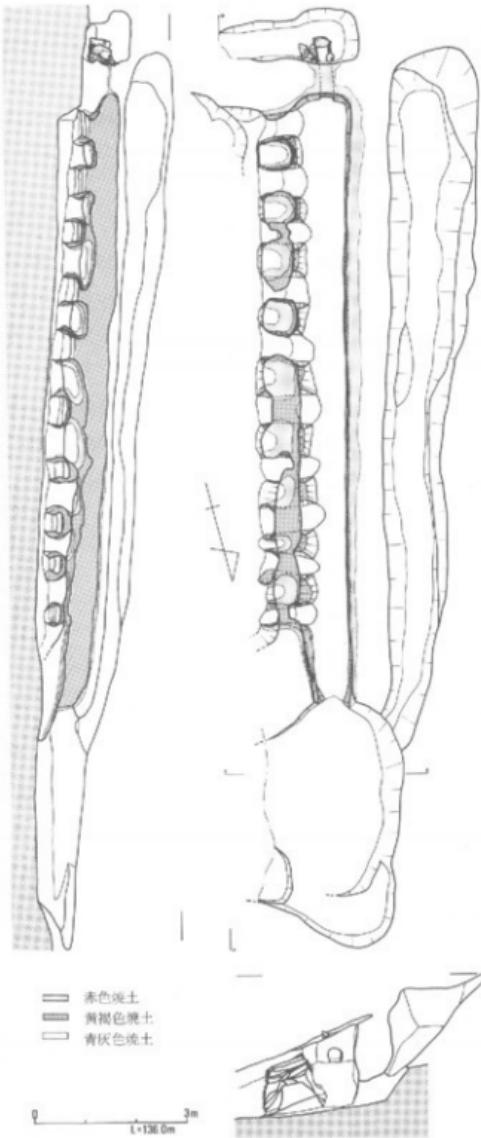
窯2の堆上は上方溝及び窯体・作業面上層については自然流入土の状況を示していた。窯内下部には天井焼土塊が一面に認められ、その下に灰を多く含む灰色土（17・19層）が検出された。天井焼土塊は吹口に近いものほど大きく、煙出穴に向かうほど小さくなっている。熱の強さを反映しているものと考えられる。天井焼土塊の下内面には木材痕の遺存しているものが認められた（第39図）。その方向は窯の主軸に対して平行するもの多かったが、一部直行するものも認められた。また、壁体にもたれかかって出土したものの中には垂直に遺存しているものも確認された。側庭作業面の最下層には黒色土（18層）が覆っていたが、その出所は横口部分からであり、窯体内には入らなかった。

窯3の堆土状況は大方窯2と共にしているが、特に上方溝の堆土には特徴がみられた。いずれもブロック状の堆積で、内部に窯の天井焼土塊の落ち込んでいるものも認められた。このことから、窯3の上方溝は窯2の構築の際に埋められたものであり、よって窯3→窯2の操業順序が確認された。窯3の天井焼土塊は窯2のものほど遺存状態が良好ではなかった。吹口寄りに残っていたが、煙出穴寄りにはほとんど認められなかった。このことからも熱の高低を反映させているものであることを認めることができる。側庭作業面の黒色土（41図）の状況も窯2と同様である。出所はやはり横口部であり、窯体内には入り込まなかった。両側は扇形状の広がりを示しており、前庭作業面のほぼ中頃まで黒色土は及んでいた。



第39図 窯2天井焼土塊実測図 (S-1:10)

窯2 (第40・41図)



第40図 窯2 平・断・立面図 ( $S = 1 : 100$ )

焼成部全長11.7m、同幅平均80cmを測る。南側に炊口、北側に煙出穴をもつ。床面は青灰色を、壁面は黄褐色を呈し、炊口部に向うに従い次第に消失してゆく。

山側には上方溝がめぐる。幅は南側ほど広く1.8mを測り、北側では前庭作業面に取りつき、幅0.7mを測る。溝底レベルは北側ほど低くなっている。

焼成部の谷側には10個の横口が検出された。最北部のものが他よりやや小さ目であるが、他は $50 \times 40\text{cm}$ の楕円形の正面観を有するものである。横口にあたる焼成部床面には外へ向かう弧状の深い凹みが認められた。

横口の谷側には側庭作業面が位置する。作業面は谷に向かって緩やかな傾斜を示す。南側では作業面境界が段によって成されていたが、北側部分は不明である。

炊口の北側には前庭作業面が位置する。幅9.5mにわたって斜面を削平したものである。炊口に近い部分で拳大の焼磧が出土した。東側部分は自然傾斜で解消されている。

焼成部の南側つきあたり部分には煙出掘り方が検出された。焼成部と約55cmを隔てた位置に幅0.7~1.1m、長さ約2.8mの掘り方があり、その内部に数個の面を捕えた石によって20×30cmの開口を築いている(第41図)。周辺には数個の流れ落ちた砾が出土していることから、本来はもう少し高い部分にまで石組が築かれていたものと考えられる。石組と焼成部とは径30cmを測る煙出穴で連結している。煙出穴内部及び石組底部は青灰色を呈している。

焼成部の傾斜角度は約36°を測る。

### 窯3 (第42・43図)

焼成部全長11.4m、同幅平均90cmを測る。南側に炊口、北側に煙出穴をもつ。床面は青灰色を、壁面は黄褐色を呈し、炊口部付近で次第に消失してゆく。

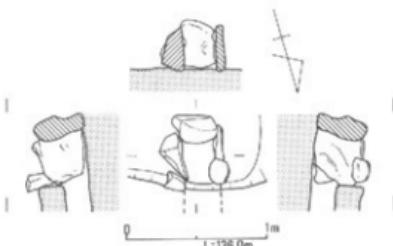
山側には上方溝がめぐる。幅は平均1.2mを測る。南側では煙出掘り方に、北側では前庭作業面の上方土壌に取りつき、その部分では幅をやや狭める。山側の掘り方は2段掘りであり、高さは窯2の作業面により削平を受けているため不明である。上方溝と窓体部との距離は75~85cmを測る。

焼成部の谷側には9個の横口が検出された。大きさはほとんど同じで幅40cm、高さ30cmの梢円形の正面観を呈するものである。横口にあたる焼成部床面にはすべてに弧状の浅い凹みが認められた。

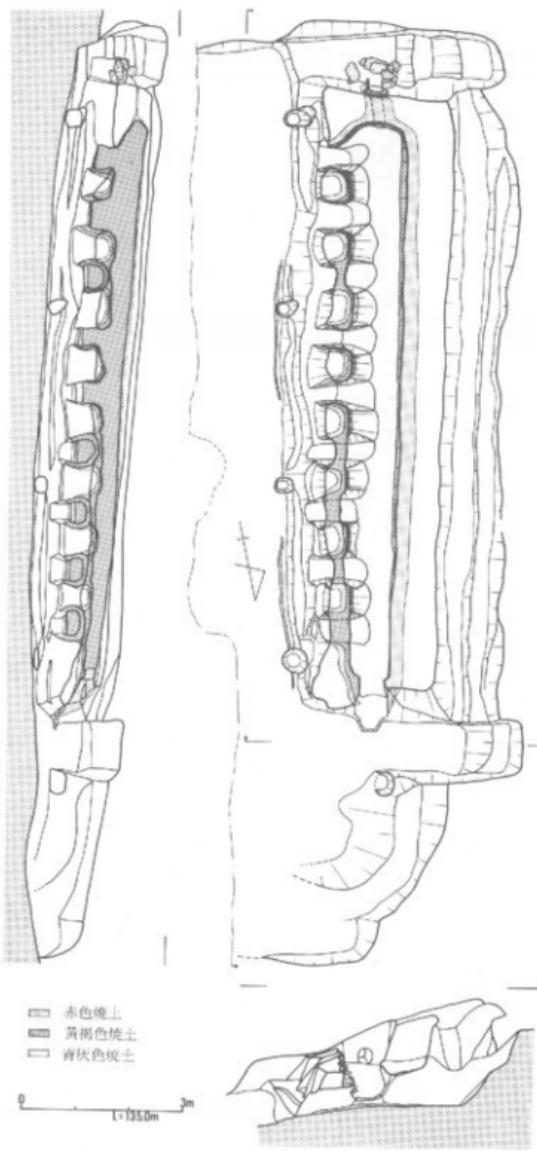
横口の谷側には側庭作業面が位置する。作業面は谷に向かって緩やかな傾斜を持っている。横口側には2~3段の低い段状施設を有し、横口底部は作業面よりも平均35cm高く作られている。また、段状施設と作業面平坦面との傾斜変換点に4本からなる柱穴が検出された。柱間距離は3.3~3.5mを測る。柱穴は径40cm前後の隅丸形を呈し、深さは約50cmを測る。埋土は灰を多く含んだ灰褐色土で、上面は炭泥じりの黒色土で覆われていた。また、両側の柱穴は横口群の両側に配され、中2本の柱穴は2つの相並んだ横口の間に掘られていることから、横口の作業とこの柱とは何らかの関係があるものと思われる。側庭作業面の南側はわずかな段状施設によって区切られているが、北側は前庭作業面と連結しており、その幅は約18mを測る。さらに東側は谷に落ちる斜面になっており、平坦面部分は約2.0mを測る。

炊口では幅約50cmに狭まる。前庭作業面側に長さ55cmの充土を行っている。また、45×50cmの板石が出土しており、これで炊口を塞いだものと考えられる。

前庭作業面は幅4.7mにわたって斜面を2段に削平したものであり、2.0~2.5mの平坦面が



第41図 窯2 煙出石組図 (S = 1 : 40)



第42図 窯3平・断・立面図 ( $S = 1 : 100$ )

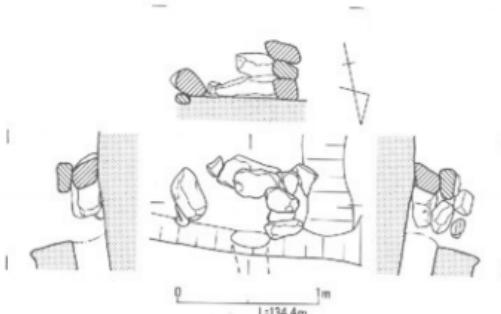
作出されている。東側部分は自然傾斜面によって解消されている。

前庭作業面の上方には幅1.2m、長さ2.8mの不明土壤が検出された。これは平面形が長方形を呈し、山側を2段で掘り込み、炕口の北側部分に長さ80cmの石をおいて圍つたものである。上方溝がそれに取り付くが切り合い関係は不明である。埋土は砂層と粘土層の互層を呈している。用途は不明であるが、煙出掘り方に対応するものと考えられる。

焼成部の南側つきあたり部分には煙出掘り方が検出された。焼成部と約55cmを隔てた位置に幅が1.3m、長さ4.0mの掘り方があり、その内部に数個の石によって $25 \times 30\text{cm}$ を測る石組を構築している(第43図)。周辺には数個の流れ落ちた礫が出土していることから、本来はもう少し高い部分にまで石組が飲み上げられていたものと考えられる。石組は掘り方底部に充土を50cmほど置き、その上に

築いている。石組と焼成部とは径約30cmを測る煙出穴で連結している。煙出穴内部及び石組底部は青灰色を呈している。また、煙出穴は窓体の主軸と若干ずれており、やや谷側に振っている。

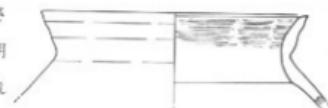
焼成部の傾斜角度は約30°を測る。



窓3出土遺物（第44図）

煙出石組部の崩落石の下から土師器が2個体出土した。

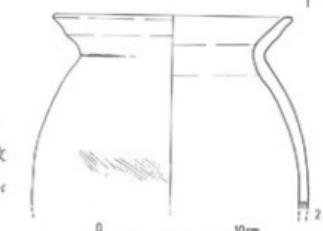
1は口縁部であり、口径19cmを測る。「く」の字状に緩やかに外反し、口縁端部は上面に端面を持つ。口縁内面にはヨコ方向のハケ目、胴部内面はヨコ方向のヘラケズリが認められる。砂粒は右回りで動いている。2は胴部中位まで残存している。口径17cm、胴部最大径19.5cmを測る。「く」の字状に緩やかに外反し、端部は丸くおさめている。表面の保存状態は悪く調整はほとんど不明であるが、外面にわずかに斜方向のハケ目が認められる。



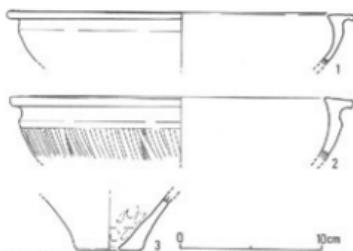
窓3埋土内流入土器（第45図）

窓3の埋土内から弥生土器片が数点出土している。B地区の弥生時代の集落の立地と窓の立地がほぼ一致することから、窓を構築する以前に弥生時代の遺構が存在していた可能性を示唆させるものである。

3点図示した。1・2は高杯形土器の杯部口縁部片である。いずれも口径25cmを測る。杯部は緩やかに立ち上がり、端部は外方へ拡張し上部に端面を持つ。1では外側端面に連続刺突文をめぐらせており。口縁部直下の外面は強いナデにより稜を持つ。外面の調整はタテハケの地文の上にタテ方向のヘラミガキである。3は籠形土器の底部片である。底部径は5cmを測り、その中央に径1.2cmの穿孔が認められる。内面の調整はユビオサエであり、外面は磨滅が



第44図 窓3出土遺物（S = 1:4）



第45図 窓3埋土中混入遺物（S = 1:4）

著しく不明である。

### (3) 遺構に伴わない遺物

ここでは特定の遺構に伴わなかったが、1ヶ所から集中して出土した一群がある（第46・47図）。また、土壙墓1の周辺より出土した須恵器（第48図）、出土場所は不明であるが、弥生時代に属すると考えられる石器及び上製品（第49図）、そして、ナイフ形石器が1点出土している（第50図）ので、それを取り上げることにする。

#### F～G—3～4区出土の遺物（第46・47図）

遺物の集中して出土した位置は、建物址1の北側にあたる。ここには明瞭な遺構はもとより簡単な落ち込み等も検出されなかった。

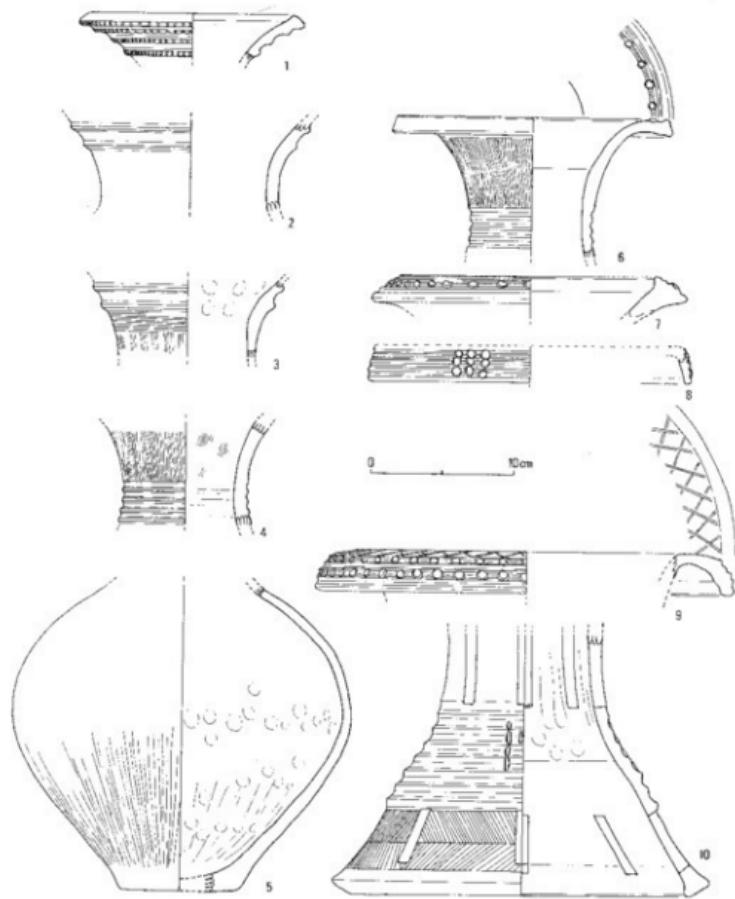
15点図示することができた。

1～8は壺形土器である。口縁部及び頸部の形状や装飾によって概ね2者に大別することが可能である。まずは短い頸部からラッパ状に広がり、口縁部外面もしくは頸部大半に貼り付け突帯を数条めぐらせるものである。1・2・3がそれにあたる。もう1つは直立した頸部からやや急激に外方へ広がり、やや肥厚させて口縁端部を形成するもので、頸部は比較的長く、外面には粗い凹線文を施している。口縁部には凹線文の他、円形浮文をめぐらせていている。4・6がそれにあたる。

1は口径16cmを測る。かなり急激に外反しており、端部は肥厚して端面は外上方に向いている。頸部に貼り付け突帯を3条めぐらせている。口縁端部を含め、突帯の先端に連続刻目文で加飾している。2・3とも口縁部を欠損しているが、いずれも貼り付け突帯から前者のタイプであると考えられる。2は頸部径約13cm、3は10cmを測る。わずかに直立した頸部から緩やかに外反する形態を示す。いずれも口縁部と頸部の境に貼り付け突帯が2条確認できた。頸部の調整はタテハケで、内面には指頭圧痕が認められる。

6は口径20cmを測り、頸部径は9cmである。ほぼ直立した頸部から外方へ水平に拡張し、口縁端部はやや肥厚させる。上面には2条の凹線文をめぐらせ、その上に円形浮文を貼り付けている。頸部には4条からなる粗い凹線文が認められる。これは凹線底部に縁を有する、断面が「V」字形になるものである。口縁部の調整はナデであるが、頸部外面はタテ方向のハケ目、内面はナデである。4は口縁部を欠損した頸部の破片である。頸部径9.5cmを測る。外面はタテハケの地文の上に4条まで凹線文が認められる。内面はタテハケが地文であるが、凹線文のある部分のみヨコナデが認められる。

7も壺形土器の口縁部であるが、両者のいずれに属するものであるかは不明である。口径は22cmを測る。口縁部はかなり肥厚し、外上方へ向けた端面には4条の凹線文と円形浮文で加



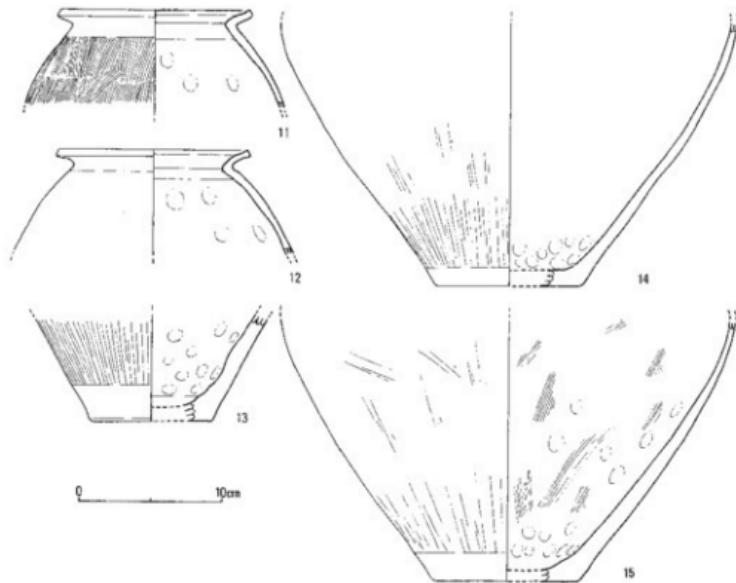
第46図 遺構に伴わない遺物2 (S = 1 : 4)

飾される。

5は壺形土器の胸部及び底部である。胸部中程に径24cmを測る最大径部を持ち、底部径は8cmとやや小さ目である。胸部外面は下位にタテ方向のヘラミガキが認められる。内面は下半が指によるナデ上げで、無数に指頭圧痕が認められる。

8~12は器台形土器である。9と10が同一個体である。

8は口縁部片で口径23cmを測る。頸部から外方へ拡張し、さらに下方へ垂れ下がる形態を示す。その外面には4条の回線文が認められ、また、その上に3段単位の円形浮文が3列まで加飾されているのが確認できた。



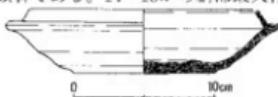
第47図 造構に伴わぬ遺物3 (S = 1 : 4)

9は口径30cmを測る。頸部から数センチ外方へ拡張し、さらに3センチ下方へ垂れ下がる。上面には2条単位の斜格子目文が描かれる。やや内傾を示す外面には4条の凹線文と、その上に2段の円形浮文で加飾される。10は脚部である。脚部径34cmを測る。緩やかに絞られ、胴部は直立し筒状を呈する。脚端部はやや肥厚し、下へわずかに拡張する。裾部には2段の綾杉文が施され、その文様帶上に8ヶ所の長方形の透し孔があけられる。その上段にはつまみだしによる数条の粗い凹線文がめぐり、一部に棒状浮文が認められた。それ以上は直立した胴部になるが、ここにも8ヶ所の透し孔があけられている。

11・12は壺形土器の胴部及び口縁部である。いずれも口縁部径14cmを測る。「く」の字に外反し口縁部に至る。屈曲部はかなり鋭角で内面に稜を残している。口縁端部はわずかに上方へつまみあげている。形態の特徴としては、胴部の最大径に比べて口縁部径及びくびれ部径が非常に小さいことである。外面調整はタテ方向のハケ目であり、内面調整はユビオサエである。口縁部はナデである。

13～15は壺形土器もしくは壺形土器の底部片である。底部径はいずれも9～10cmを測る。緩やかに外方へ立ち上がる。底部付近は強いナデによってやや直立気味に立ち上がる。外面調整はタテ方向のヘラミガキである。内面は15に見られる様にタテ方向のハケ目を施している。ま

た、指頭圧痕も多く認められ、特に底部付近に顕著である。14・15から胴部最大径をみると、いずれも約32cmを測る。



#### 遺構に伴わない須恵器（第48図）

第48図 遺構に伴わない遺物4 (S = 1 : 3)

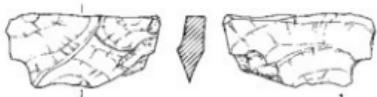
土壤墓1の周辺から出土した。2分の1程度残存している。

口径12cm、最大径14.5cm、器高3.4cmを測る、須恵器の杯身である。立ち上がりがかなり内傾し低い。体部と立ち上がり部の境界に溝を持っている。底部はヘラケズリの後ナデで仕上げている。形態的特徴から陶邑縦年（註1）のTK209に対応するものと考えられる。

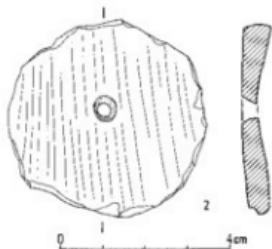
註1 田辺昭三『陶邑古窯址群』1 平安学園クラブ 1966年。

#### 遺構に伴わない石器・土製品（第49図）

1はサヌカイト製の楔形石器である。1.8×3.7cmで厚さが0.7cmである。上面に平坦な打面があり、下部は尖り、背腹両面とも下部に階段状の小剥離が認められる。弥生時代の石器製作に伴う残核と考えられる。



2は紡錘車である。径4.7cm、厚さ0.6cmを測る。傘形上器もしくは菱形土器の胴部下半の破片を利用しておらず、外面にはタテ方向のヘラミガキがあり、内面にはハケ目が認められる。ほぼ中央に径0.5cmの穿孔があり、これは外側側から一方的にあけられているものであることが看取された。



第49図 遺構に伴わない遺物5 (S = 2 : 3)

#### ナイフ形石器（第50図）

出土場所は不明である。サヌカイト製のナイフ形石器の基部である。最大幅は1.7cm、現長は2.3cmを測る。厚さは約0.6cmである。不定形の横長剥片を素材としており、背面には切断された際のタテ方向の剥離痕が認められる。刃済加工は両側面に認められる。打面を除去し続いて反対側にも刃済を行っている。刃部は欠落している。また、打面除去の刃済加工に背腹両面から調整加工を行う対向剥離が認められる。



津市市内においては本例が3例目の出土である。1例は岡山県教育委員会が中国縱貫自動車に伴う発掘調査をした天神原遺跡からであり、もう1例は津市市教育委員会が発掘調査をした押入西遺跡からの出土例である。

註 『津山の歴史と文化財』津市教育委員会 1987年。

## 5. まとめ

### (1) 弥生土器の編年的位置について

崩レ塚遺跡からは、建物址1とF～G～3～4区よりかなり一括性の高い遺物が出土している。また、遺物の量は少ないものの、それぞれの遺構から出土した土器をみても、概ね1つの時期を設定して良いように思われる。従って、ここでは崩レ塚遺跡の弥生時代集落が同時期のもの、または1時期の間に収まる短期間に営まれたものとして理解し、このことを前提として論を進めてゆきたい。

まずは壺形土器の特徴から見てゆきたい。壺形土器の口縁部および頭部の形態からみて、概ね3つのタイプに分類することができる。まず、頭部から外反しながら口縁端部にいたるもので、外面には貼り付け突帯が数条めぐるものである。これを壺A類とする。もう1つは、筒状の頭部が最高位に達した時に外方へ拡張し、やや肥厚もしくは垂れ下がる口縁部を持つものである。このタイプの頭部には粗い凹線文が施される。これを壺B類とする。このB類は口縁部端面の装飾性に富んでおり、円形浮文・櫛搔斜格子目文・連続刺突文等をめぐらせていている。さらに、1例のみ遊離遺物として出土しているものに、頭部に突帯を貼り付け、指により刺突をめぐらせるタイプのものが認められる。これを壺C類としておく。

壺A類はF～G～3～4区出土の1～3が挙げられる。概ね3条の突帯が認められるが、他の装飾は施されていない。

壺B類はST3の2・3を代表として挙げることができる。口縁部は外方に拡張してさらに下方へ垂れ下がるものである。外面には凹線文・円形浮文が認められる。脇部には上半に凹線文・櫛搔斜格子目文・連続刺突文・円形浮文等がみられる。調整の特徴は外面がタテ方向のヘラミガキをヨコ方向のヘラミガキで切るもので、内面はハケ日で底部付近をナテ消すものである。この壺B類はSH3の1～3・9、SB1の6、F～G～3～4区の4・6がそうである。いずれも装飾が多く、特に円形浮文が目立っている。頭部にはいずれも粗い凹線文が認められ、これらは断面形が「V」字になるものである。

壺C類はA地区の遊離出土遺物で1点あるだけである。口縁部は欠落しており不明である。

以上の特徴を美作地域で類似資料を求めるに、まず高本遺跡（註1）の資料が挙げられる。高本遺跡における壺C<sub>1</sub>類が本遺跡の壺A類に、高本遺跡の壺A類が本遺跡の壺B類に、そして高本遺跡の壺F<sub>1</sub>類が本遺跡のC類にそれぞれ対応するものと思われる。高本遺跡の編年案によると本遺跡の出土資料は高本I式に並行するものと考えられる。

また、沼E遺跡の7号長方形堅穴住居状遺構（註2）出土の遺物に本遺跡の資料の共通性が認められる。壺形土器の口縁外面には3条の突帯がめぐり、連続刺突文が施される。また、脇部外面の調整は上半がタテハケ、下半がタテ方向のヘラミガキをヨコ方向のもので切っている。

これは、本遺跡のA類に共通している。しかし、沼E遺跡のものには四線文を持つものが認められないことから、本遺跡よりもやや前出のものと思われる。

津山中核工業団地の北側に位置する西吉田遺跡（註3）においては、少ない資料数ではあるが、西吉田I式を設定している。本遺跡の資料との比較をすると、西吉田I式には本遺跡の壺B類とC類は認められるものの、A類に欠けている。このことから、本遺跡の資料は西吉田I式の前に位置付けられると考えられる。

ここで本遺跡出土の彫形土器、高杯形土器及び器台形上器について言及してみたい。

彫形上器はかなり多量に出土しているが、ここではSB1のものを取り上げてみたい。まず7に見られるように小型の彫形上器が認められる。胴部の中位に最大径を持ち、底部と口縁くびれ部が非常に小さく作られる特徴が認められる。前述の高本遺跡からの出土例においても同様のタイプのものがある。また、もう1つのタイプとして5のように大型のものがある。これは岡山県南の百間川今谷遺跡の溝12出土の1593（註4）がまさに同タイプのものであり、彫形上器との共伴関係にしても矛盾しない。また、津山市内においては竹ノ下遺跡（註5）溝1出土の彫形上器が同類型のものである。

高杯形土器は杯部が皿状になるものは出土していない。いずれも鉢に近い形態を示し、口縁部は外方に拡張をみせる。装飾性に富み、摘み上げの突帯に刻目の文様を持つものも認められる。これは高本遺跡の資料に照合すると高杯D類にあたる。

器台形土器についてはF-G-3~4区の一括資料に良好なものがある（第46図9・10）。これは裾部に纏杉文を施し、その上段に數枚の粗い四線文をめぐらせ、棒状浮文を持つ。長方形の透し孔が2段に認められる。口縁部も装飾性に富んでおり、外方へ拡張した口縁部の外面には四線文と櫛格子目文、2段の円形浮文が施されている。この類例は前述の高本遺跡にも認められる。また、四線文の形態として、この器台形土器に認められるものが、壺A類と壺B類に認められる突帯もしくは四線文の中間形態を示す点が注目される。即ち、壺A類に認められる貼り付け突帯、器台形土器のもののように摘み上げの凸帯を並べ付けることにより粗い四線文として表現し、更に壺B類のような粗い四線文へと変化してゆくと考えられることである。しかし、この仮説を前提としたところでこれによって崩レ塚遺跡出土資料を3時期に分割することはできない。これは変化の方向性を示したものであり、そのような共存は他の例（註6）でも多く認められることである。

以上のことから津山中核工業団地内及びその周辺、さらには津山市内の弥生時代中期の編年を考えると次の様になる。中期中葉を古・中・新の3つに分けると、古～中段階には沼E遺跡の資料が相当すると考えられる。これは、貼り付け突帯を持つものの、四線文がまだ出現していないことによる。そして、中段階には高本I式があるが、崩レ塚遺跡の出土遺物はそれと並行かもしくは新段階に入るものである。これには資料的な不足により、高本I式との並行関係

が明瞭でないことと、前段階としてとらえた貼り付け窓帶の量質とともに不明瞭さ、さらには新段階にあたる回線文の発達等で必ずしも高本Ⅰ式と並行関係にあるかどうかが不明なためである。新段階には西吉田Ⅰ式がそれに当る。

弥生時代の中期の後葉になると、古段階として金井別所遺跡の資料が挙げられる。この段階になると、貼り付け窓帶は完全に姿を消すが、中もしくは新段階で再度崩レ塚遺跡巣C類に類似するものが登場する（註7）ことがある。これは機会を改めて言及したい。

以上のように少ない資料からではあるが、編年の試案を立ててみた。しかし、いずれにしても金井・瓜生原地域の弥生時代中期の集落の中では現在のところ崩レ塚遺跡が最古のものであることは事実として認めてよいように思われる。

## (2) 特殊窓状遺構について

崩レ塚遺跡から3基の炭窯と考えられている特殊窓状遺構が検出された。津山中核工業団地内の遺跡からは7基を数える（小原遺跡が3基、大畑遺跡が1基）。また、工業団地内ではないが金井別所遺跡（註8）からも1基検出されているので、この周辺の丘陵部からは今までのところ8基が確認されることになる。さらに、津山市内で確認されているものを加えると、緑山遺跡から9基（註9）、鮎込遺跡から1基（註10）、向林遺跡から1基（註11）、中山田遺跡（註12）から1基の計12基で、津山市内からは20基が確認されることになる。

しかし、依然としてこの特殊窓状遺構を炭窯とするのに疑問を持つ意見も多く認められる。これは、この窓状遺構が例えば竪穴式住居や建物址のように「多くを語らない」とこと、出土例がまだ稀少であり、研究者がこの窓状遺構の声を「多く聞き取れない」ことに起因するものと考えられる。炭窯肯定論者は製鉄炉を含む遺構総体としてこの窓を製鉄に関わる製炭の窯として位置付ける。一方疑問を持つ者としては、床面の被熱状況が還元焰焼成を受けており、これでは炭にならず灰になってしまこと、横口の用途が依然不明瞭なことで論を進める。筆者としては私論を持ち合わせていないため、ここでは「多くを語れない」ので、この問題については機会を改めて言及することにしたい。

ここでは3基の窓状遺構を調査して判明した事實をまとめておきたい。

まず、窓の方向であるが、窓の立地する丘陵斜面の面する谷の低い方向（谷口）へ炊口を向ける。これは、風の方向と関連するものと考えられる。

続いて窓の天井の構造についてである。天井焼土塊が窓体内に落ち込んでいる。この内面には木材の痕跡が遺存していることは、緑山遺跡で指摘されたとおりである。それを今回は木材痕の方向を中心に調査した。その結果、窓状遺構の主軸に並行するものと直行するものの2者が認められた。ただし、並行するものは窓体部のはば中央部に当るものに認められ、直行するものは窓体部よりの焼土塊に認められた。また、窓体にもたれかかって出土したものには垂直に残されているものも確認できた。このことから、当時の構築状況を復元すると、窓体に沿つ

て木材を立て並べ、続いて天井部は窯の主軸に並行に木材をわたしていることが推察される。焼上塊内面は顯著な曲面を呈していなかったので、窯体内はアーチ形をしていた可能性には若干の疑問が残る。

次に側庭作業面に見られる炭化物の黒色上であるが、やはり焼成部には入り込んでいなかつた。しかし、焼成部の床面には一部灰を多く含んだ灰褐色土層が認められ、また、側庭作業面にも黒色上の下位から同一層が出土している部分が検出された。このことから、少なくともこの窯状遺構においては炭と窯が何らかの関わりをもって側庭作業面にかきだされた事実が指摘できる。さらに、横口からは数個の焼跡が出土していることから、横穴の用途の1つにはそこを塞ぐことによる空気調整穴の役目を果たしていることは認められるが、焼成部床面の弧状の凹み、黒色土の分布状況から、その横口が炭の排出穴であったことも容易に判断される。

今回の調査で窯3から4本の柱穴が検出された。それは窯体部と側庭作業面の中間部分に位置する。また、横口部分を避けて柱穴が存在しており、横口における作業と関わりをもつていることが認められた。作業面の谷側を精査したが、それに対応する柱穴は検出されなかつた。このことから当時作業面の上にはその4本の柱を支柱とした片屋根の覆屋が想定される。恐らく、その傾斜は山側に低くなつており、その端部は上方溝にあり、雨露はその溝を伝つて窯体部の外側に流し出されていたと考えられる。

続いて煙出部である。この形態には2者が認められた。1つは窯2・3に認められる従来の形態、即ち窯体とは別の掘り方を持ち、石組によって煙突を作り出すものである。もう1つは窯体内に粘土及び礫を利用して煙突を作り出している窯1に見られるタイプである。両者は同一谷部に面しているが、上方溝の有無、窯体の大きさ等で明確な差異が認められる。窯1のタイプを退化形態として捉え、3つの窯状遺構のなかでは最新のものとして考えたい。

最後に3つの窯状遺構の構築順序についてまとめておきたい。窯2と3の順序は土層断面等から窯3→窯2の移行を確認することができた。また、前述のように窯1を最新形態として考えるならば窯3→窯2→窯1の構築創業順序を想定することができる。しかしながら、その形態的な相違点が多いことから、窯2・3と窯1の両者の創業には若干の時間的隔たりが想定される。一方、窯3と窯2の間には窯3の上方溝を窯2の構築の際に埋めている状況が看取できることから、両者の創業には時間的な隔たりが少なかつた、つまりは連続して創業された可能性が指摘される。

以上、思いつくまままとめてみたが、崩レ塚遺跡から検出された窯状遺構の周辺からは綠山遺跡で明確に認められたような製鉄関連遺構は全く確認できなかつたことが、崩レ塚遺跡の最大の特徴であると思われる。周辺部からは製鉄を想定させる鉄滓等も全く出土していない。この点は明らかに綠山遺跡に見られる炭窯のもつ意味と大きく異なると思われる。津山中核工業団地内の遺跡の中で見てみると、いずれも窯状遺構と並んだもしくは重なつた状態で製

鉄関連遺構の検出された例がなく、このことは両者即ち製炭作業と製鉄作業が異なった地点で行われたことを示唆している。このことは更には同じ製鉄作業のなかでもその作業工程においていくつかの類型が認められることを意味しており、今後はそのような方向の研究も必要となってくるものと考えられる。

(註1) 山野康平・岡田博「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会 1975年

(註2) 中山俊紀・行田裕美「沼E遺跡II」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集 津山市教育委員会 1981年

(註3) 行田裕美「西吉田遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集 津山市教育委員会 1985年

(註4) 平井泰男他「百間川今谷遺跡I」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51」岡山県教育委員会 1982年

(註5) 中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会 1982年

(註6) 河本清・行田裕美・保田義治・小郷利幸「金井別所遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集 津山市教育委員会 1988年

(註7) ピシャコ谷遺跡の第5号長方形住居状遺構の一括資料の中に、崩レ塚遺跡壹C類に類似した壺形土器が見られる。行田裕美「ピシャコ谷遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会 1984年

(註8) (註5) に同じ

(註9) 中山俊紀「緑山遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集 津山市教育委員会 1986年

(註10) 津山市が発掘調査を実施。報告書未刊。

(註11) 津山市が発掘調査を実施。報告書未刊。

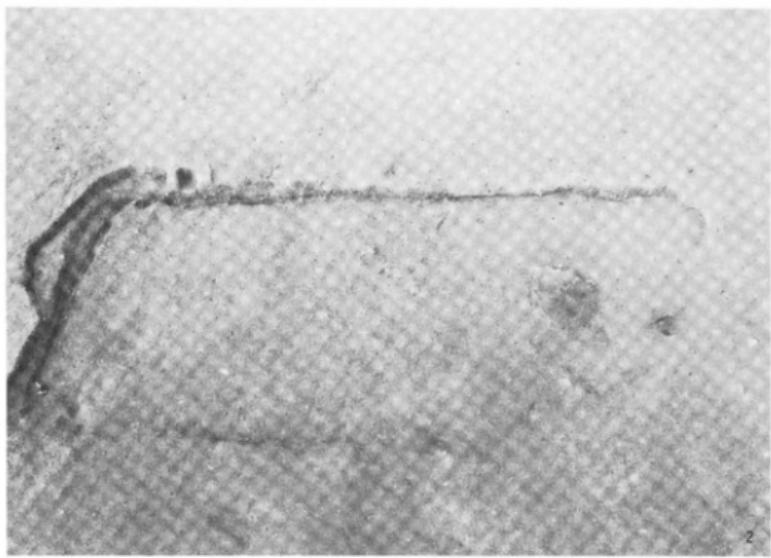
(註12) 林道工事により発見された。報告書未刊。

# 図 版

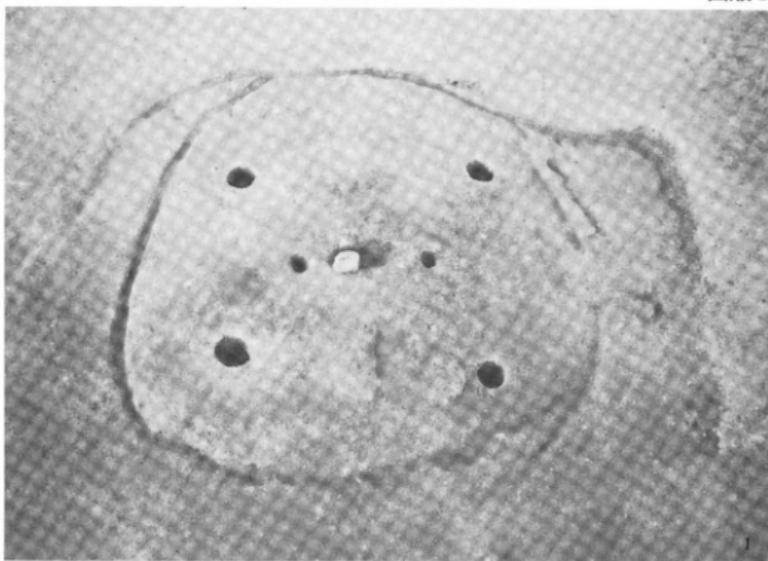




崩レ塚遺跡A地区全景（南から）



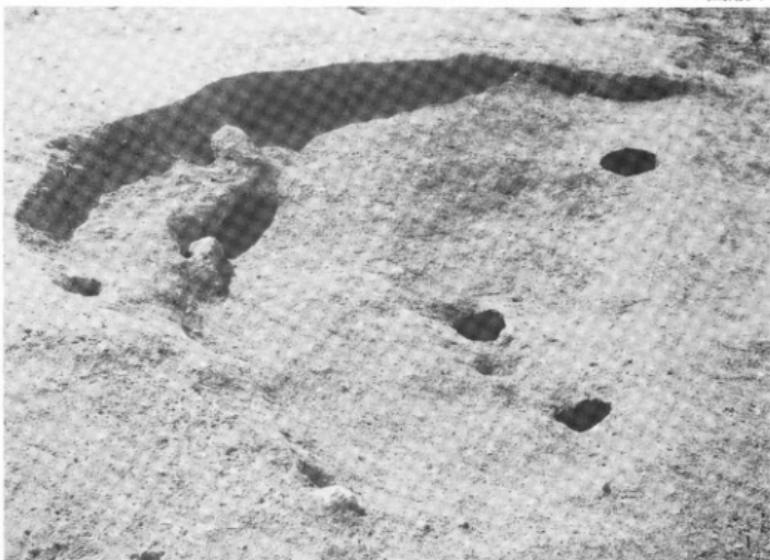
住居状遺構 I



住居址 2



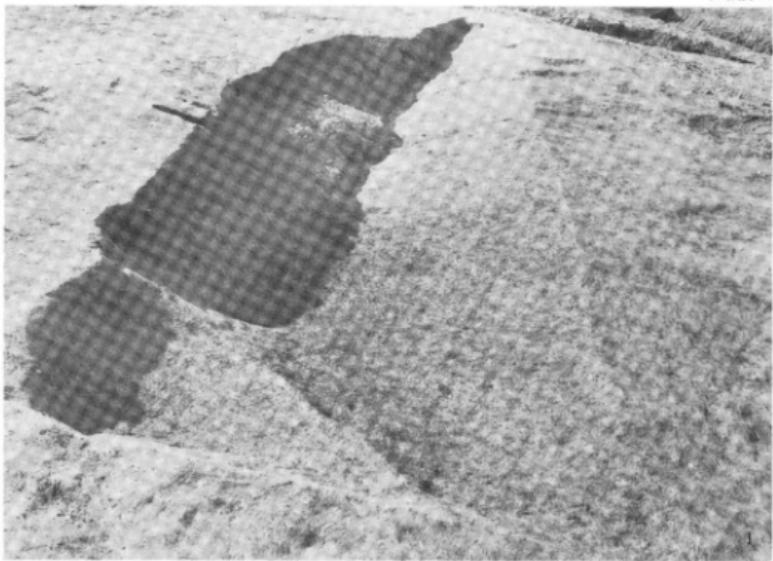
住居址 3



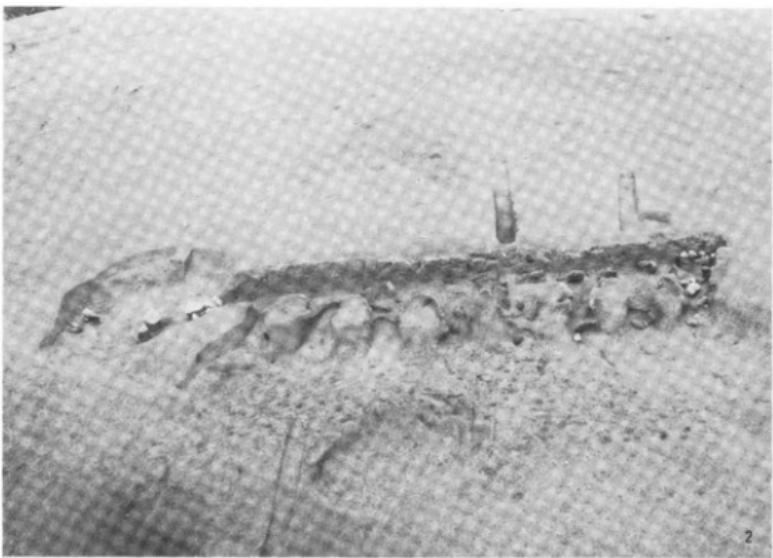
段状遺構 1



段状遺構 2



段状遺構 3



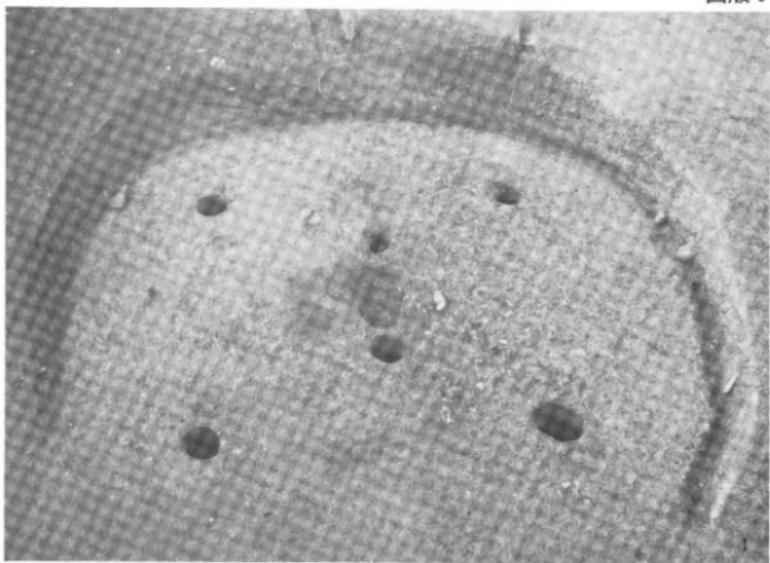
窯 1 全景



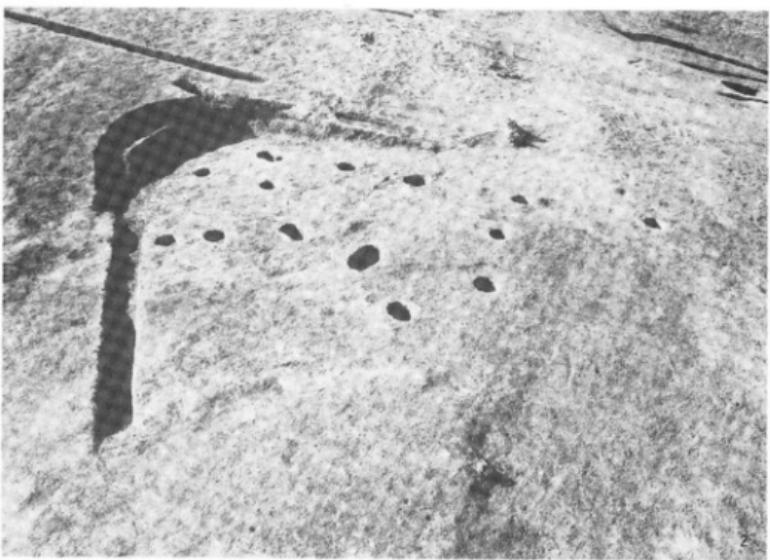
窓 1 煙山石臼部分



窓 1 全景(炉口側から)



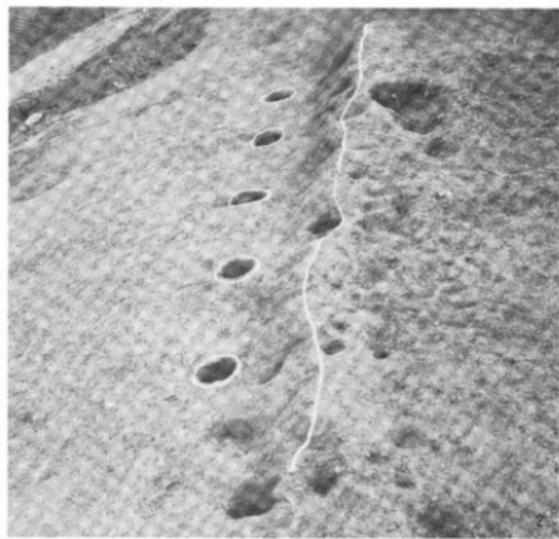
住居址 4



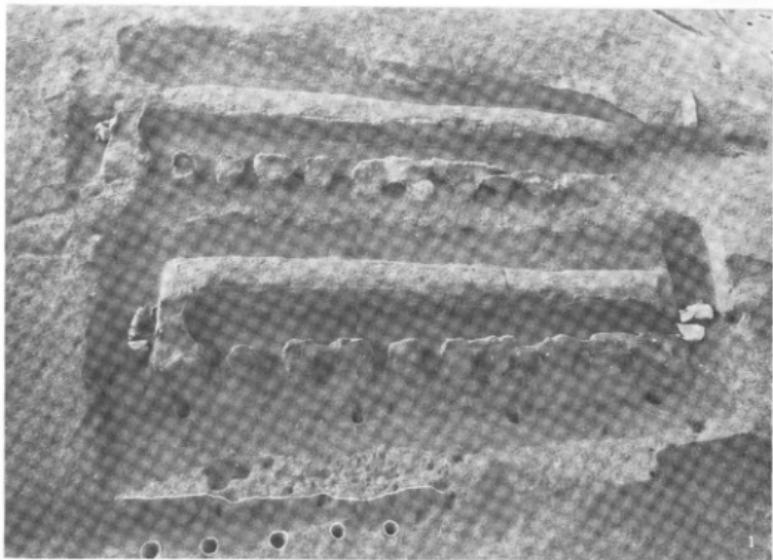
建物址 1



段状遺構 4



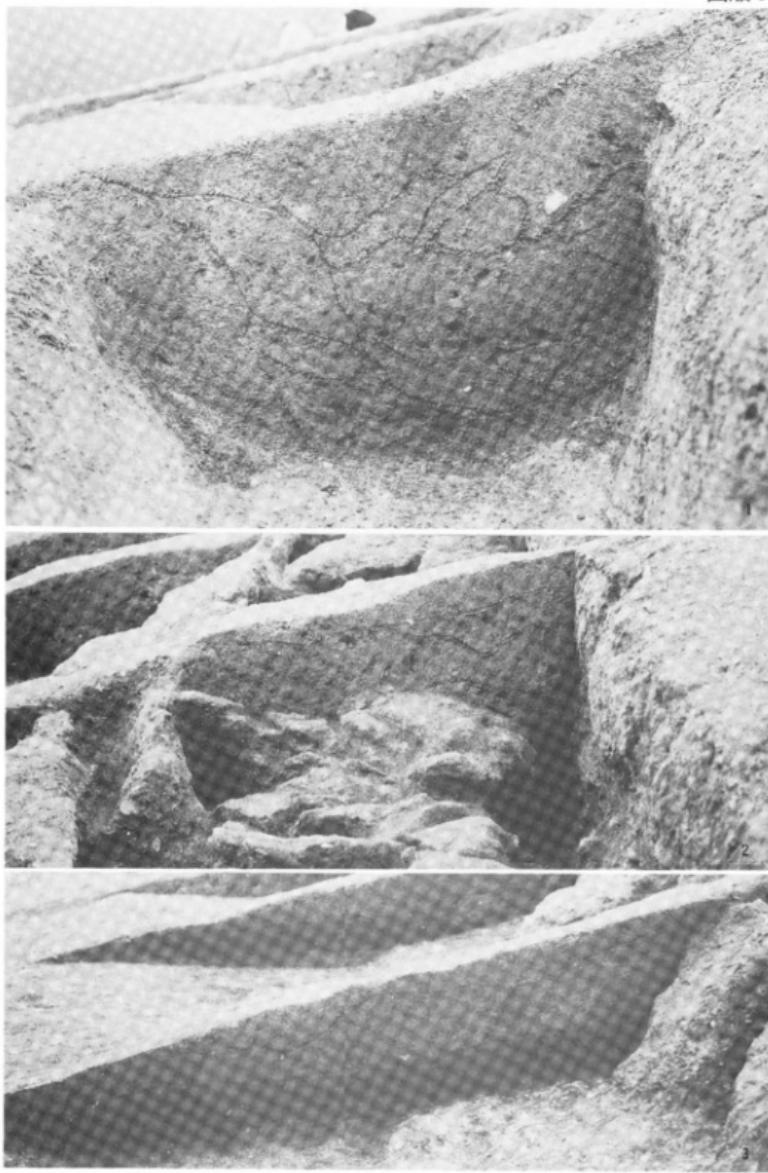
段状遺構 5



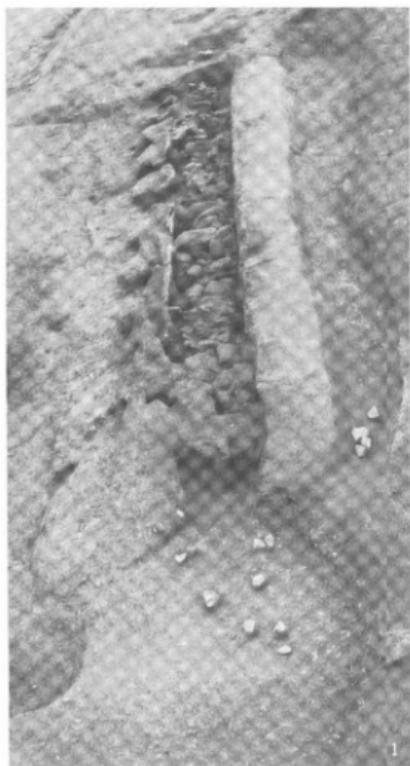
窯 2・3・段状遺構 5 全景（上から）



窯 2・3・建物址 1・段状遺構 5 全景（南から）



第2 土壠断面C (1:上方溝、2:窓体内、3:側庭作業面)



窯2 検出状況 全景(吹口側から)

1



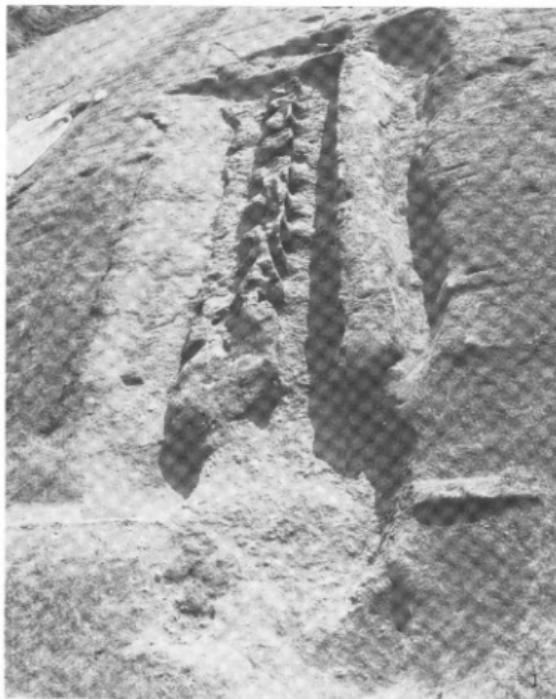
3

▲天井焼土塊



2

窯2 天井焼土塊出土状況(山側から)



案2 光沢状況 全景（吹口側から）



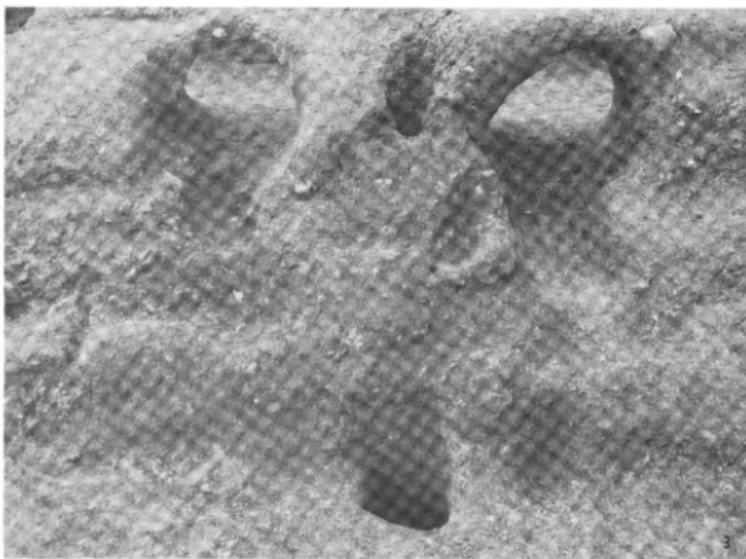
案2 突出石膏部



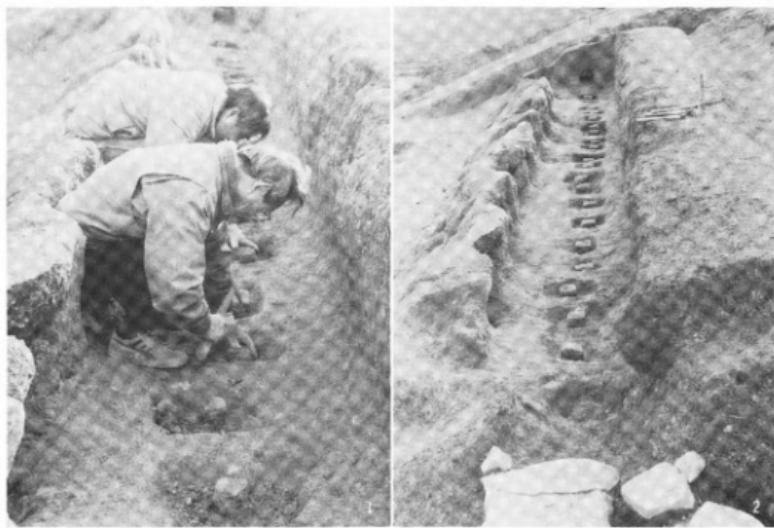
窯3 検出状況 全景（運送側から）



窯3 検出石組部分

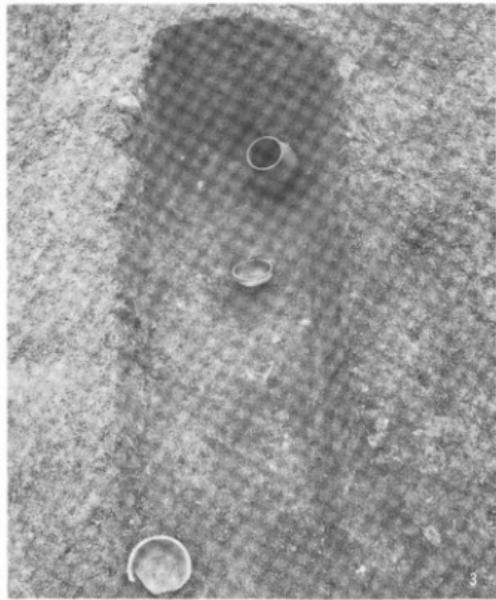


窯3 横口・柱穴部



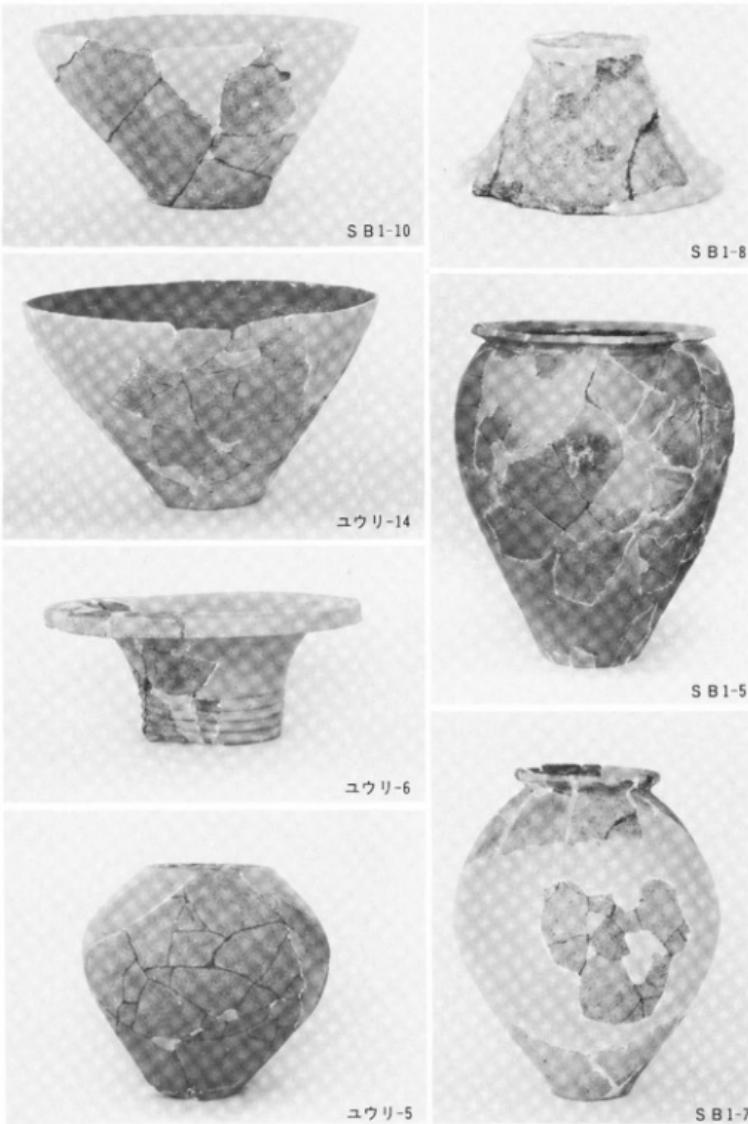
▲1：熱残留磁気測定資料採取風景（人物は、伊藤・時枝両氏）

2：熱残留磁気測定資料採取状況（窓3）



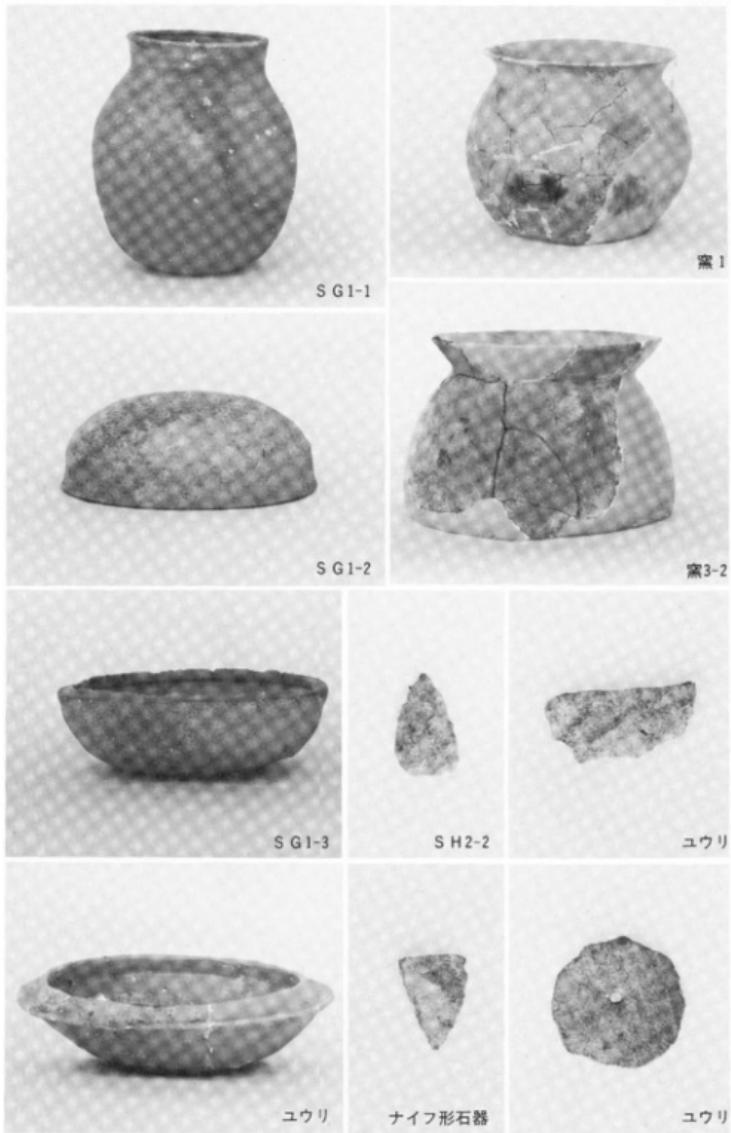
土 壤 基 1

図版14



出土遺物（弥生土器）

図版15



出土遺物（須恵器・土師器・石器・土製品）

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集

# 崩レ塚遺跡、

—津山市坂口某地区埋蔵文化財発掘調査報告5—

平成元年8月31日発行

発行 津山市土地開発公社

津山市教育委員会

岡山県津山市山北520

印刷 (株) ゴトウ印刷

岡山県津山市西寺町63